

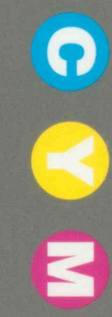
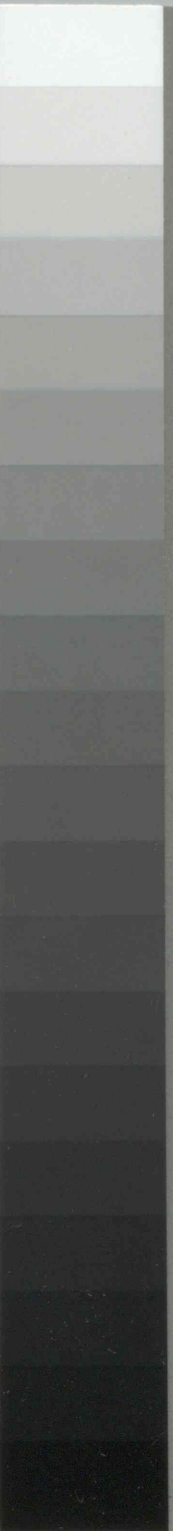
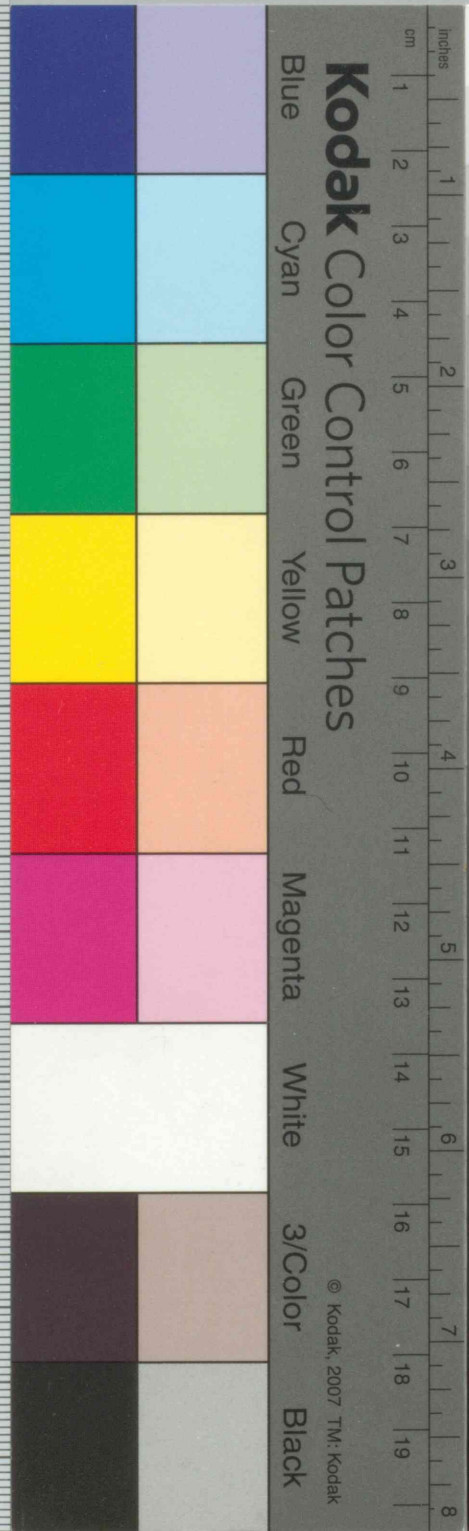
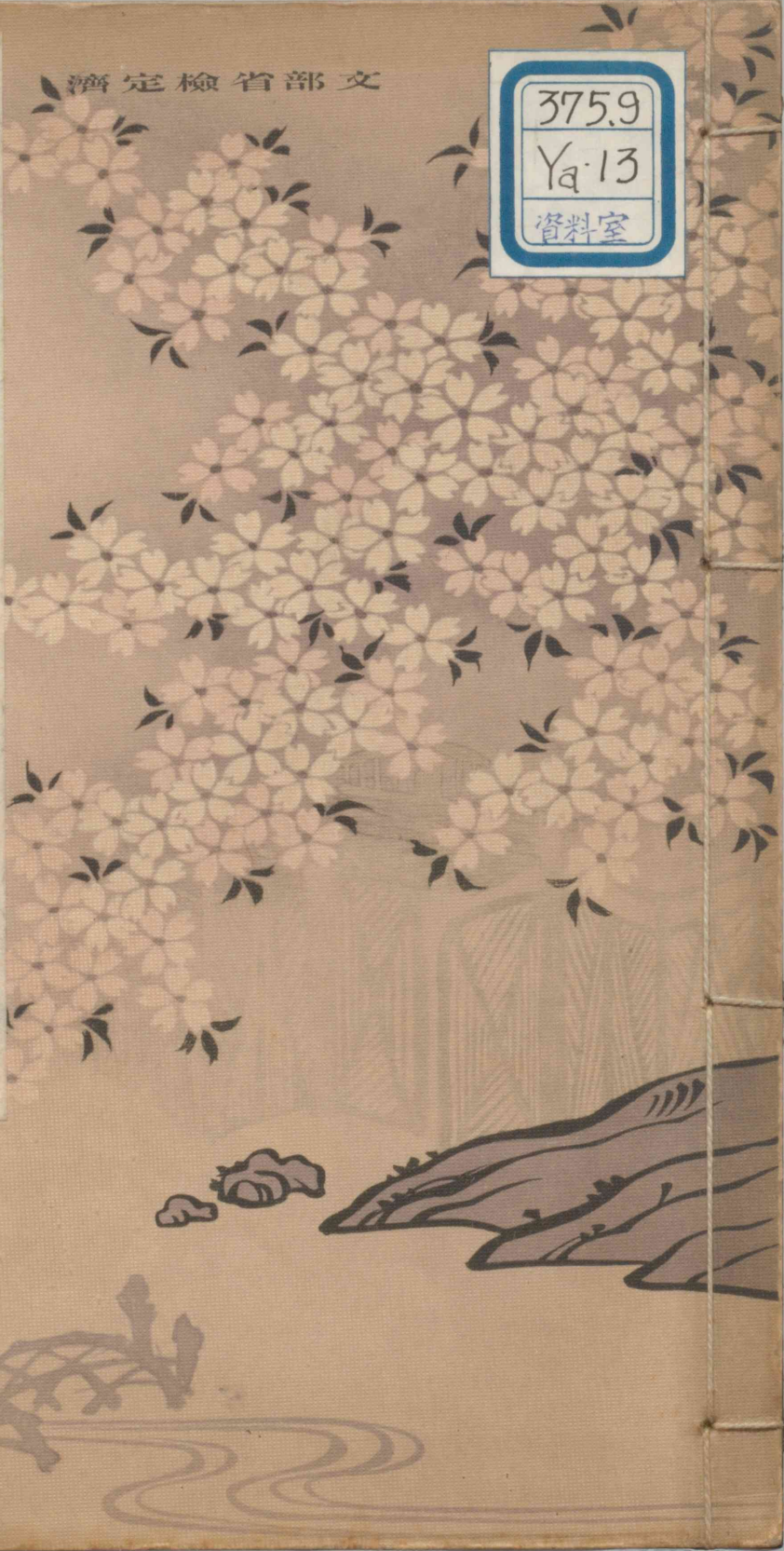
子女皇國新讀本

四年制用

卷二

濟定檢省部文

375.9
Ya.13
資料室



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42431
教科書文庫
4
810
42-1938
20008
63429

s. 3
1938.



資料室

教育部省定

昭和三十一年八月二十八日高等女學校學業國語科

37519
12/13

子女皇國新讀本

東京文理科大学
助教授 山岸德平
学习院教授 岩田九郎 編

東京株式會社
帝國書院





筆汀春元山

士 富

富士山
富 士
本
山

卷二 目次

- 一 秋の小天使
- 二 皇后陛下
- 三 木の實草の實
- 四 秋の夜の歌
- 五 讀書の樂しみ
- 六 音の世界
- 七 眞の武士
- 八 果物の味
- 九 落ちる林檎

- 薄田 泣董
- 下田 次郎
- 森田 恒友
- 與謝野 晶子
- 貝原 益軒
- 宮城 道雄
- 正岡 子規

目次

一

〇一〇	猫の失敗
〇一一	漱石の思ひ出
〇一二	落葉
〇一三	滿洲の生活
〇一四	東海道の富士
〇一五	富士の歌
〇一六	多摩御陵參拜
〇一七	子猫を飼ふ
〇一八	スキーの旅
〇一九	動物園雜觀
〇二〇	畫家の苦心

夏目漱石	五
眞鍋嘉一郎	六
島崎藤村	六
鳥居さみ子	七
田山花袋	七
西條八十	八
茅野雅子	八
吉村冬彦	九
黒田米子	九
柳澤洪園	三

〇二一	傳書鳩
〇二二	春來る詩
〇二三	銃後のつとめ
〇二四	ポチ
〇二五	三月の言葉
〇二六	安宅
〇二七	裸の王様

小野賢一郎	二七
三木露風	二七
大久保弘一	二七
二葉亭四迷	二七
北原白秋	二七
坪内逍遙	二七
楠山正雄	二七

〔附録〕

日常最も誤り易い假名遣
國語假名遣一覽

一 二

薄田泣菫
名は淳介
岡山縣の人
詩人・隨筆家

懶(モノウ)し
蟋蟀(コホロギ)
直翅類の昆蟲



窄(ツボ)める

女子皇國新讀本

四年制用 卷二

一 秋の小天使

薄田 泣菫

「ひん、かち。——ひん、かち。——ひん、かち。——……」
閉め切つた障子に、秋の日が明るくあたつてゐる午後
三時過、懶ささうな蟋蟀の歌に混つて、ふと、こんな聲を私
は聴きつけた。それは、誰もがひとりぼちの心寂しい
折に、われ知らず唇を窄めて吹く口笛のやうな弱いかす
かな音であつた。

胡麻白(シゴマ)

刺毛(サシゲ)

恰幅(カッブク)



鶉

私はもしやと思つて机の前を離れて、そつと障子を開けて見た。

私は一目で、その聲の主を見つけることが出来た。それは胡麻白の頭と、金茶の胸毛と、眞黒な翼とをもつた小鳥で、兩肩のあたりに眞白な刺毛が際立つて光つてゐて、まるで紋付羽織でも一着に及んでゐるやうな恰幅だ。

「ひん、かち。——ひん、かち。——ひん、かち。——……」

小鳥は長い旅に出てから、半年ぶりに歸つて來たので、

最眞筋(ヒイキ)

披露

鶉(ヒタキ)

燕雀類の鳥
大きさは雀位

先驅者
鶉(モズ)

百舌とも書く
燕雀類に屬する

そこらの最眞筋へその由を披露し、かねてまたその間の無沙汰を詫びてでもゐるやうに、その一節ごとにひよくり、ひよくりと老人めいた胡麻白の頭を下げて、こくめいにお辭儀を繰り返してゐる。

「やつぱり鶉だつたな。彼奴、もうやつて來てゐるのか。」私は口の中で呟いた。この時、小鳥ははじめて私の姿に氣づいたらしく、お辭儀を半分しされたまゝ、眞黒な顔を傾けて、きよろ／＼と私の方を見まもつてゐる。

秋はその尖鋭な緊張しきつた氣力を、鶉の先驅者である鶉の、あの小英雄的な負けじ魂の中に植ゑつけてゐる。

痾 颯爽

餘熱(ホトボリ)

潑刺



私が今年の秋初めて鶉の鳴き聲を聴いたのは、九月の十三日であつた。それは朝のことであつた。あたりの立木の第一の梢で、元氣よく長い尻尾を振りまはしながら、

「き、き、き、き……」

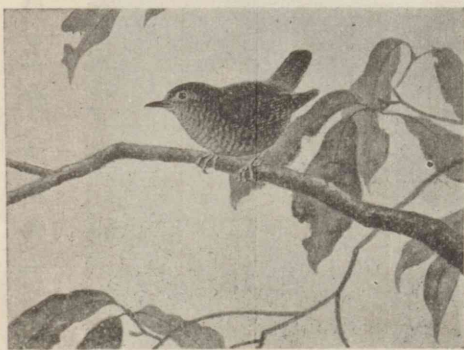
鶉と痾の高い強い聲で高鳴きをしてゐた。その颯爽たる姿を見た時には、その瞬間、まだそこばく残つてゐる眞夏の汗臭い餘熱が、一氣に跳ね飛ばされ、初秋の潑刺たる健かさと、明徹な冷やかさとが、そこらにふりかかるやうに感じたものだ。

閑寂 隱遁 鶉 (ミソサザイ) 燕雀類の鳥 形は雀に似てそれよりも小さい 孤獨者

愛嬌

秋はまた、閑寂と隱遁とを樂しむ心を、鶉のあのくすぶつた小さな胸の中に産みつけてゐる。鶉は鶉に、おくれ、木の葉がすっかり枯れ落ちた頃、こつそりとやつて來る孤獨者で、どんな場合でも道づれを伴はない。

この二つの小鳥にはさまれて、十月のなかば過に、ひよつくりと訪れて來る鶉こそは、日和續きのこの頃にふさはしい來客で、到るところで、持ち前の愛嬌と人の好さを振り撒いてゐる。この頃になると、木の實はそれ／＼黄色に、



鶉 鶉

爆(ハ)ぜる

豊穰



草庵

また赤色に熟し、草の實はふくらみきつた莢からおのづと爆ぜ割れて、そのはずみにぴち／＼とかすかな音を立てて、広い外界へと飛び出す。どこを見ても、豊穰と成熟と收穫との季節だ。

蜂は蜂で、正午前後のほか／＼と暖かい頃を見計つて、「もう一稼ぎだ。あとは長い休息だ。」

と、元氣よく巢から飛び出し、残りの花に蜜をもとめ歩いて、頭のでつぺんを黄色い花粉だらけにしてゐる。蓑蟲はまた早くから、枯葉で縫ひ綴つた草庵のなかに、隠遁生活を送つてゐたが、二三日暖かい土天氣がつゞくと、すっかり見限つてゐた世間の事々がまた思ひ出されるらし

四十雀(シジフ)
燕雀類の鳥
 輕業師
 座方

てんで

く、一旦閉めきつた草庵の小窓から眞黒な顔を出して、きよろきよろとあたりを見廻してゐる。

程近い岡の上では、四十雀が輕業師の様に、多勢の小さい座方を引き連れて来て、騒々しくはしやいでゐる。

座方の小坊主連は、ちよこまかところましやくれた身のこなして、そこの立木の小枝につかまつては、てんでに習ひ覺えた得意の藝を、これ見よがしにおさらへをしてゐる。あるものはとんぼがへりを、あるものはま



四十雀

た、ぶらんこを、といつたやうに。

誰も彼もが氣忙しさうに動いてゐるなかへ、ひよつくりと歸つて來た鶉は、持ち前の人の好きから、人家の垣根近くに紛れ込んで、

「ひん、かち。——ひん、かち。——」

と、低い調子で歌ひながら、金茶の胸當に紋付羽織の着付で、バネ仕掛か何かのやうに、愛嬌たつぷりに、びよこびよこと胡麻白の頭を下げどほしに下げてゐる。

この鳥の慇懃さを見て、世間の人々、わけても農民達は、
「彼奴、俺を見て、べこくお辭儀をしてゐる。伯父さん

慇懃

綽名(アダナ)

善意

恥辱

とでも思つてゐるのかしら。馬鹿鶉だな。」

と、こんな失禮な綽名をつけて、ともすればこの小鳥を馬鹿扱ひにしようとする。だが、それは人間の淺はか過ぎる間違ひだ。この紋付羽織の小坊主は、持つて生まれた人の好きから、世間はすべて善意に満ちてゐて、誰一人害心を持つてゐるものがあらうなどとは思はないで、誰彼の分け隔てもなく、友達づきあひに、愛嬌を振り撒いてゐるのだ。あの金茶色の胸毛に包まれた小さな魂の、いたいたしいまでの善良さを、少しでも傷つけるやうなことがあつては、人間にとつて大きな恥辱だと言はなければならぬ。(獨樂園に據る)

下田次郎
廣島縣の人
文學博士
東京女子高等師範
學校名譽教授
聰明

二 皇后陛下

下田次郎



皇 后 陛 下

御聰明に渡らせられる皇后陛下が、少女で在しました頃の御日常生活は、豊かな藝術的御趣味によつて、實に美しく拜せられた。「まあ何といふ美しいお聲なのでせう。」人々はその澄み渡つたソプラノ獨唱の御聲を洩れ聞いては、今更のやうに、それに引きつけられるのであつた。繪畫は女子學習院時代に、木炭畫と水彩畫

大和繪
日本畫の一派
平安朝の中頃か
ら始り、やがて
土佐派の繪畫と
なつて發達した
織細

手かき



姫 宮 の 御 時 代

とをお學びになられたが、その後は大和繪をお描きになられた。御手先の優れて器用で綿密な御方なので、大和繪の織細な線で、人物や風景等を御取扱ひになるのは、いかにも御ふさはしかつた。書にも大層趣味深くあらせられて、お習字を遊ばされぬ日は殆どなかつた。御書風なども、舊い手かきの長所をお採りになり、飽かず御勉強遊ばされた。

要領

輕快

又、講話會などには、いつも御出席になり、御歸邸の後は、必ず講話の要領を周圍の人に御物語り遊ばされるのであつた。これ等の御研究は、少女でおはしました頃だけでなく、その後と雖も、日毎に課業を御いそしみ遊ばされたので、國語・漢文・和歌・佛語などの御進境は、實に驚かれるばかりであつたと承る。



御幼少の御時代

かうして、御學藝に御多忙であらせられた間にも、體育に深い御注意を拂はせられ、特に庭球では、輕快な御動作

薙刀(ナギナタ)

五尺
約百五十二種

玲瓏

をお見せ遊ばされた。又薙刀のお稽古には、優しい御姿の姫宮が、輕い御筒袖で、長い柄をひたとお構へになつて、きつとお相手に向はせられ、澄み透る御掛聲で、「やつ」と打込ませ給ふ御形は、何とも申し上げやうもなかつたと傳へられてゐる。かうした御運動家であらせられたため、箱根その他に成らせられると、お附の人達がこれはと御心配申し上げるやうな山坂をも、眞先にお歩きになられた。その頃既に、御身の丈が五尺を越えさせられ、完全な御健康體であらせられた。玲瓏玉のやうな御人格については、その頃の御文章や御歌によつて、幾多の尊い實例を拜することが出来る。

ひま

拜誦

澁谷

東京市澁谷區

枯草のひまに生ひたる初若菜摘みてさゝげむ神
のみまへに

この御歌を拜誦すれば、直ちに敬神の御心を拜察する
事が出来る。澁谷の久邇宮御殿の側に、さゝやかな御畑
がある。その半ばは四季の草で満たされ、半ばは秋が來
れば黄金色の稻が實つた。それもこれも、すべては姫宮
がお手づからの御丹精によるものであつた。そして、姫
宮は、この新穀を白木の三方に載せて、あの森の中の神殿
に齋き祀つてある皇大神宮の御前に捧げさせられた。
尚、御自身の御事は決して人手を借らずに遊ばされる
と共に、他人に對する御同情の深くあらせられたことは

丹精

新穀
三方

齋(イツ)く

近侍

數々の御作文によつても窺ひ奉ることが出来る。「身を
つみて人の痛さを知る。」と題せられたものや、「人の同情心
は、境遇によつて深淺の別があると聞く。それならば、自
分などは境遇上、自然、同情心が浅いのではあるまいか。
それを自分は恐れる。」といふ意味をお書き遊ばされた御
文章などを拜したものは、何れも感激に堪へないこと
であると語り合つた。

かうして少女でおはしました頃の御徳の一端を窺ひ
參らせただけでも、近侍の人達が、一齊に「完成せられた美
しい御女性」と讚美し奉つたことの、道理であるのを感じ
ないものはあるまいと思ふ。(女子新修身書に據る)

森田恒友

埼玉縣の人
畫家
昭和八年歿
年五十三

三木の實草の實

森田恒友

ほゞづき
多年生草本で高
さは三―五程位



老緑

小品

五六年前の春に、子供が田舎へ行つて、祖母にほゞづきの苗を頂いて來た。それを庭の一隅に置いて置いたら、その秋から、赤いほゞづきが、せまい庭の秋を彩つてくれるやうになつた。三本が五本に、五本が十本にといふ風に繁殖して、未だ凡ての庭木が老緑である中に、ほゞづきに實だけが眞赤に色づくのが、數年來、初秋に私を慰めてくれる。緑の葉かげに垂れる眞紅のほゞづきの袋は、美しくもあり、可憐でもある。私は秋の來るごとにそれを愛しては、年々同じやうな小品を描いてゐる。

烏瓜
多年生の蔓草で
果實は鶏卵大
風情(フセイ)

同じ眞紅の實であるが、烏瓜の實は又違つた風情のあるものだ。ほゞづきは軟かい緑の蔭に見るのがよく、烏瓜は深緑の森の中、とりわけ樅や檜の葉かげの高いところに、點々として垂れてゐるのが美しい。田舎の寺の裏庭や、道端の藪の中に、思ふさま絡み上つてゐて、夏のうちはちつとも氣がつかないが、秋が訪れるに従つて、おやと思ふところに眞紅の玉を點じ出す。烏瓜はほ



瓜 烏

野趣

ほづき以上に野趣に充ちた色をしてゐる。
 秋は、古人も「春花秋實」と言つてゐるやうに、特別、草木の實の美しい時だ。春の花が色とりどりに美しいやうに、秋の實は木の實も草の實も、霜葉の美に先立つて、それぞれに美しい彩を現じ出す。そしてこれ等の様々な樹の實や草の實は、とりわけ野邊や村里に美しい變化を與へてくれる。野邊や村里が長い夏の間、あまりに平凡な景色にかくれてゐたから、秋になつてとりわけ美しさが眼立つのだ。多くの小鳥が野に群り來るのも、あながち好餌を目當に集るばかりでもないやうにさへ見える。そ

あながち好餌

唐辛子(タウガ)

茄科の植物
莖の高さ七〇—八〇

れほど野邊や村里は美しく又可憐になる。

野路を歩いてゐて、私がいつも不思議な美しさに打た



唐辛子

れるものは、路傍の畑の葉蔭に、眞赤になつてゐる唐辛子だ。平凡な畑の中に、かれが眞赤に酔つてゐる色は、如何にも秋の野趣を語る。「愛すべきものよ。」

と、ついその一つ二つを摘み採つて見たくなる。秋の強い日にかつと酔つたやうな唐辛子、赤くなるだけがその一生の目的らしく見える唐辛子。私はこの素朴な唐辛

珊瑚

梅もどき
落葉灌木で高さ
四―五米に達す

子を愛する。霜を見ようとする頃の木の實で、好ましいのは、あの珊瑚の珠をつけたやうな梅もどきだ。小春日の武藏野をぶら／＼歩きながら、農家の庭先などに、梅もどきの小さい紅の珠玉が、細い枝に群をなしてついでるのを見ると、何となしに秋の興が湧いて来る。可愛らしいその色が、淋しい秋を愛らしく、又賑やかにしてくるやうな氣がする。

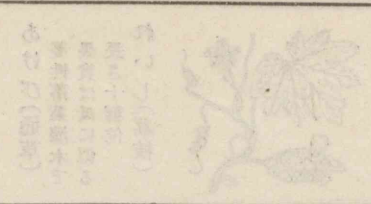


きども梅

蒼空

籬
いが(毬)

色感



柿の實も亦農家の秋を彩るが、その面白さは寧ろ霜がおりて樹々の葉が落ちてからである。蒼空を背景として張つた枝に、點々と附いてゐるのが見上げるのが最も美しい。柿・栗・葡萄の實の面白さは、却つて折り採つた一枝や一房がよいことが多い。未だ色づかぬ青柿の一枝を折つて来て、甕に挿した面白さ、こぼれさうに口を開きたいがの幾つかをつけ



筆風五野佐

葡萄

白さでなく、主としてその形、その様子の面白さだ。葡萄の房は優しい秋を、栗の實は素朴な秋を、青柿は頼母しい秋をそれ〴〵受け持つて現してゐるかに見える。様々な秋の姿がそれ〴〵の實に現れてゐる面白さ、それは色彩の秋ではなくて、風情の秋とも見えよう。

秋晴の日少し山の手に近い野路など歩いてゐて、ふと見る傍の藪の上に、ぼつかりと口を開けたあけびや、れいしに出遭つた時の心持は、全



あけび

あけび(通草)
蔓性落葉灌木で
果實は瓜に似る
長さ十厘米位
れいし(荔枝)



石榴(ザクロ)
落葉喬木で幹の
高さ三米餘

く秋の嬉しさといへよう。毎日眺めてゐる庭の石榴でさへ、幾つかの實をつけてから、それが口を開けるのは楽しく待たれるものだ。まして野路を歩いてゐて、思ひもつかぬ目の先に、幾つかのあけびが、ぼつかりと口を開いて秋の日を浴びて居るのに出遭つたとしたら、誰でも子供のやうな驚きと嬉しさを、同時に感じさせられるであらう。秋の實の風情は、花のやうに優しくはないが、多くは正直さうで素朴でしかも美しさがある。秋の自然の美の中で、かれ等がこのやうに正直で、素朴で、美しい點が最も吾々の心をひくのである。(平野雜筆)

與謝野晶子

堺市の人
歌人

四 秋の夜の歌

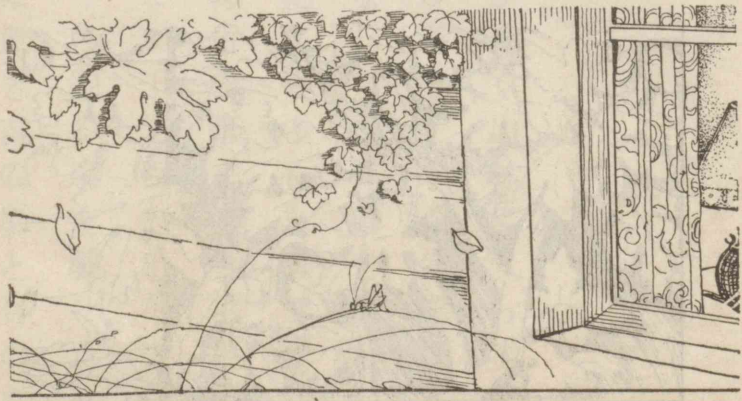
時計を見れば十一時、
 秋の夜長の嬉しさよ、
 筆さしおきて、また更に、
 己が時ぞと胸をどる。
 立ちつつ棚の本を抽く。
 夜更けて物を讀むことは、

抽(ヌ)く

與謝野 晶子



田を刈る人が手を止めて、
 しばらく空を見るよりも、
 更に澄み入る心なれ。
 一のページをそつと切る。
 今夜新に讀む本は、
 未知の世界の旅ぞかし。
 初めの程は著者とわれ、
 少し離れて行くもよし。



敬ふごとく次を切る。

ただうち黙し讀むことを、

もどかしとする蟲ならん、

我に代りて爽かに、

前の廊より聲立てぬ。

電燈のいろ水に似る。

(街頭に送る)



貝原益軒

名は篤信
筑前の人
江戸時代の儒者
正徳四年没
年八十五

五 讀書の樂しみ

貝原益軒

およそ讀書の樂しみは、よろこび深く、山林に入らずして心しづかに、富貴ならずして心ゆたけし。この故に、人間のたのしみこれにかふるものなし。一日書を讀むの樂しみ至れるかな。聖賢の書を見て、その心を得て樂しむは、たのしき事の至りなり。次に、古の事を記せる史には、我が國は神武天皇より今年まで二千三百七十年、唐土は黄帝より今迄凡そ四千四百餘年の間の事を載せたり。この故に、からやまとの史を見れば、遠き古のあと、目のあ

二千三百七十年
昭和十三年まで
二五九八年
黄帝
支那上古の天子

かたくな

たりに明らかに見えて、わが身恰もその世に遭へる心地して、數千年の齡を保てるが如し。この樂しみも亦大いなるかな。今、目の前なる事のみを見て、古の書を知らざるは、極めてかたくななり。



益軒百像

凡そ古今の書に通じて、理を極め事を知らば、わが心の中、萬物の理、見る事聞く事に疑なくして、大いなる樂しみな

古き書を見ず、古の道を知らざる人は、萬の理に暗く、諸の事を知らず、夢見て覺めざるが如く、迷ひて一生を過す。これ大いなる不幸なるかな。

翫ぶ
愛(メ)づ

わざなるべけれ

るべし。古の史を知らずんば、からやまと古今天地の中にみちくたる理も事も、皆通ぜずして、暗しといふべし。四時に隨ひ、月花を翫び、折々の景物を愛で、その折節にかなひたる唐の大和の古き歌を誦して、心に樂しまんこそ、自ら作る勞なく、たやすくして、いと面白きわざなるべけれ。もろこしの古、その才餘りありし人も、時に臨みて、その折にかなへる古き詩をかれこれ引きて、その情を敘べしためし、少からず。これわが作らんより、古めかしく、理まさりて、人を感じしむる事深かりしにや。古の事、法とすべし。我が如き輩、才拙くて詞を巧にせんとする苦しみ、いと煩はしく覺ゆ。もし天才ある人、たやすく作り

出ださんは、興あるべし。

およその事、友を得ざれば爲し得べからず。唯、讀書の一事は、友なくてひとり楽しむべし。一室の内に居て天下四海の中を見、天地萬物の理を知る。數千年の後にありて、數千年の前を見る。今の世にありて、古の人に對す。わが身愚にして、聖賢に交はる。これ皆讀書の楽しみなり。およそ萬のことわざの中、讀書の益に如く事なし。然るに世の人これを好まず。その不幸甚だし。これを好む人は、天下の至樂を得たりといふべし。

二

四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見ることを

至樂

三餘
冬と夜と陰雨の時

經傳

狄仁傑
唐の則天武后に
仕へた人
うべ

益軒十訓
貝原益軒の教訓
書中主なもの十
種を集めたもの

楽しみ、つねにしてやむべからず。なんぞ只三餘の時にかぎるべきや。春夏は日の長きを愛し、秋冬は夜のながきをよるこぶ。折を得て楽しむべし。日ながけれど事しげく、客おほければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ、日ひと日、夜ひと夜、ふみ見る益は、いかなる富貴の楽しみにもかへがたし。經傳を讀めば、そのたびに聖賢の教をまのあたり聞くが如し。たふとぶべきことかぎりなく、空しく過ぎぬる隙をしまべし。狄仁傑の「名教の内至れる楽しみあり、なんぞ俗人とかたることを好まんや」といへるもうべなり。(益軒十訓)

宮城道雄
兵庫縣の人
箏曲家

六音の世界

宮城道雄

毎年正月に、私の家の庭先へ一羽の小鳥が来る。それは去年のも一昨年のもその前の年のも同じ小鳥である。だが、家の者は誰もそれが毎年同じ小鳥だとは気がつかない。唯私だけが知つて居て、その囀る聲を聞いては「あ、今年も亦正月を祝うてゐるな」と嬉しく懐かしく聞き入るのである。

眼の見える家人が知らない小鳥を、どうして盲目の私だけが知るだらう。外でもない、私は小鳥を眼で見ず、耳で聞くのだ。毎年、同じ音色と調子とで囀るのを聞いて、

私にはちやんとそれが前年と同じ小鳥といふ事がわかるのである。

私達盲人は、たゞ音の世界にばかり生きてゐる。これは外の人からは、全く不自由な世界のやうに思はれるかも知れない。併し、決して不自由でも、淋しい世界でもない。

私は都の真中にゐて、海の潮鳴りを聞く。といつたら、人は怪しむかも知れぬが、天候が悪くなつて、嵐の兆が見え出した日などに、ちつと坐つて耳を傾けて居ると、都會の騒音が正しく海の潮鳴りに聞えて来るのだ。遙か彼方から轟いて来るこの潮鳴りに耳を傾けながら、私は、身

潮鳴り

兆(キザシ)

防空演習
昭和八年八月東
京市で行はれた
防空演習

體を都の真中に置きながらも、魂は遠く海邊に遊ぶことが出来る。盲人の世界も亦楽しいかな。さて、先日、甚だ愉快な話があつた。それは例の防空演習が行はれた頃の事だ。

ある日、私は盲學校の生徒達と話をして居た。すると、一人の生徒がこんな事を言ひ出した。

「日本は國民皆兵の國だから、一朝國家に事ある場合は、盲人と雖も安閑としては居られぬ。だが、銃を執つて、覗ひ撃つわけにも行かぬ。どうすればいゝだらう。」

「我々は眼こそ見えぬが、耳がちゃんと聞える。萬一の

一朝

安閑

覗ひ撃つ

最前線

場合には、皆で最前線に出て、敵機の爆音を聴きつけようではないか。」

勇ましい、そして無邪氣な、しかし眞剣な話を聞いて、私はわれ知らず微笑みながら、

「だが、そんな場合に、不幸にして帝都が壊滅したとすると、盲人は逃げ遅れてしまふ。そんな場合だから、盲人の手をひいてくれる人もあるまい。それでもいゝか。」
といふと、彼等は口々に、

壊滅



器音聴

褒(ホ)める

矢庭

「無論かまはぬ。」
 「それこそ本望だ。」
 と答へた。
 盲人にもこれ程の愛國心がある！といさゝか得意になつた私は、數日後、この話を知人の將校に話した。定めし褒めて貰へると思つて熱心に話したのだが、それを聞いた軍人は、矢庭に怒聲をあげて、私を叱りつけた。
 「馬鹿を言つてはいけない！我々軍人があなたの方盲人を残して、只の一人でも逃げると思つてゐるのか！」
 叱られながら、私はもう一度嬉しくなつた。

七 眞の武士

秀吉が臨終に先立つて、
 「余の死は、當分の内發表するな。」



前田利家

と遺言し、五奉行に誓書せしめて後に身まかつた。然るに石田三成は、前田利家に媚びる爲に、他の奉行の目を盗んで、利家に使を走らせ、秀吉の死を密告した。

丁度これと行き違ひに、利家からは淺野長政に宛てて、
 秀吉の病狀を尋ねて來た。けれども長政は誓書を重ん

五奉行
 淺野長政
 増田長盛
 石田三成
 長東正家
 前田玄以
 誓書

割粥

じて居るから、
「今朝も割粥を食べられ申した。」
と返事した。即ちまだ死んで居ない譯である。



淺野長政

然し五奉行が秘しても、二十日
許りたつと、秀吉の他界は隠れな
い事實として、多くの人々の知る
所となつた。

その後間もなく、長政が何かの
用件で利家を訪れた。利家は、面會すると直ぐに、不機嫌
らしい顔付で、

殿下

「殿下御他界の事は、その頃、知らせて呉れた者があつて

嘘

承知致し居り申した。」
と、手紙の嘘を素破抜いた上、日頃の親しさに似合はず、怨
がましい事をも言つた。然し長政は、何とも氣に掛けな
いらしく、頗る落ちついて答へた。

「それは思ふに、石田治部が密告した事で御座らう。勿
論、間違ひない事で御座る。けれども、殿下の御遺言を重
んじない事は、殿下に對する信義を守らない者で御座ら
う。御身は誓約を破却した者と嚴守した者とは、何れが
眞の武士かを、篤とお考慮有りたい。」

長政の毅然たる返事や態度に、成程と深く感じた利家
は、只大きくうなづいたのみであつた。(利家夜話に據る)

八 果物の味

正岡子規

正岡子規
名は常規
松山市の人
俳人・歌人
明治三十五年歿
年三十六

果物ほど味はひの高く清きものはあらじ。小兒は之

を好み、仙人も之を食ふとかや。

青梅

青梅は酸くして口を絞れども、鹽

少しばかりつけんには、味はひい

ひがたし。杏はからびて賤しく、

李は水多くして淺はかなり。莓

は西洋莓を良しとす。されど行

脚の足くたびれて草鞋の緒ゆる

みたる頃、巖の角に腰うち据ゑて、汗を拭ふ手の下に、端な



筆規子

行脚(アングヤ)

端なく

聖木十歌集



石 齋

碧・虚
河東碧梧桐と高
濱虚子
共に子規の弟子
諏訪山
神戸市の北方に
ある

なべての人

晝餉(ヒルゲ)

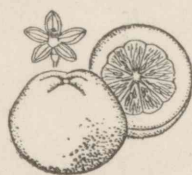
く見附けて取り食ひたる、味はひは問はず、時に取りていと嬉し。神戸に病みし時、物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲みえぬに、わが爲にとて碧虚二子の朝なく、諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉をもたらしくれたる、いかばかり嬉しかりしぞ。枇杷はうまけれども、種子大きく肉少きは飽かぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外にして甘きものはなし。晝餉さへしたゝめずに、貪りたる木曾の旅の



筆造三田和

杷 枇

ザボン
蜜柑の一種柑橘
類中最も大きい



筆蹟

團栗 團栗の落
ちて沈むや山
の池
榎實 一本に子
供あつまる榎
の實かな
披(ヒラ)く

思ひ出でられて懐かし。夏蜜柑・ザボンの類、俗を離れて涼し。さして良しとにあらねど、少し病みて飯さへえたうべぬ時など、またなきものとぞ覺ゆる。梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら、一片を口にしたる、氷にも優りてすがくしうこそ。林檎は北海道の産を最上とす。齒に觸るれば形消えて、すゞやかなる風味ばかり口中に残りたる、仙人の薬にも似たらんか。桃には種類

團栗 團栗の落ちて沈むや山の池
榎實 一本に子供あつまる榎の實かな

蹟筆規子

王母

西王母
仙人の名
漢の武帝に桃を
すゝめたといふ
傳説がある
後園
甜瓜(マクハ)
(ウリ)

野氣

多し。良きもあり、悪しきもあり。王母後園の風味は知らねど、すべて桃は世に詔はぬところに一段高き趣あり。甜瓜・西瓜、鄙びたれど誠あり、すて難し。葡萄は甘からず、賤しからず、人に媚びず、さりとして世に負かず、君子の風あり。栗は賤し。甘薯と比べられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷やかなる腸を持ちながら、味はいと濃やかなり。多血性の人、世を厭ひて里に隠れながら、なほ物に觸れて熱血を迸らすにもたと



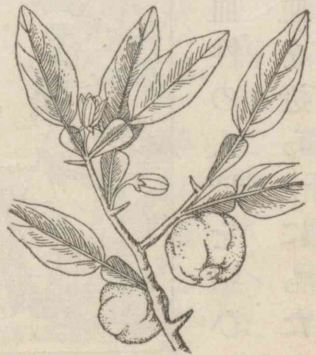
筆信元野狩

母王西

柚子(ユズ)
高さ三米餘の小
喬木で果實は香
味がある

へんか。 柚子は氣高けれど食ふべ
からず。 石榴無花果のわれから裂
けたるは食劣りぞする。

我この夏頃よりわけて果物を食
り、物書かんとすれば、必ずこれを食
ふ。 書きさして倦めば又これを食ふ。 食へば即ち心涼
しく、氣勇む。 氣勇めば則ち想湧き、筆飛ぶ。 われ力を果
物に借ること多し。



子 柚

十顆
散亂

日ごとく、十顆の梨を食ひけり
朱硯に葡萄のからの散亂す

(子規全集)

九 落ちる林檎

ニュートンが二十四歳、西暦一六六五年のことであり
ます。 英吉利全體に傳染病が大變流行しました。 首府
のロンドンだけでも、六萬人の死者を出したといふ騒ぎ
でした。

ケンブリッジ大學でも、この病氣の熄むまで、一時休業
して、その難を避けることになりました。
その間にニュートンは、ウールスソルプのお母さんの
處へ歸省したのであります。

この頃、ニュートンは、年來考へてゐた學問上の一大疑

ニュートン
英國の數學者・
物理學者
(一六四二—一七二七)
ケンブリッジ大
學
ロンドンの北東
約九二軒、同名
の都市にある英
國最古の大學
熄(ヤ)む
ウールスソルプ
ロンドンの北凡
そ一七〇軒

天體
軌道
重力
地球が物體を引
きつける力

冥想



ニュートン

問を解決しようとして、全精力を傾けて居ました。その疑問といふのは、天體が定まつた軌道の上を運動する原因は、重力ではあるまいか」といふのでしたが、なか／＼その証明が出来なくて、獨りで頭を悩まして居ました。

それで歸省中も、静かな田舎の家で、朝夕思をめぐらし、考を練つて、この疑問の解決に努力して居りました。

ある暖かい日の午後、何時もの通り、庭の林檎の樹の下に椅子を持ち出して、例の問題について深い冥想に耽つ

て居りました。所がその眼の前に、突然「ポトン」と大きな音を立てて、熟しきつた赤い林檎の實が、一つ落ちて來ました。あたりは、梢の葉一つ揺がぬ物静けさ。さすがはニュートンです。

「風もないのに林檎が落ちる、これは不思議だ。どうして林檎は天に向つて落ちないで、地に向つて落ちるのだらう。」と、頭をかしげました。

その途端に思はず「あつ」と言つて同時に「解つた！」と膝を叩きました。

「この林檎は、地球に引きつけられて、落ちたのに違ひない。物を引く力は、たゞ地球にだけあるものではなく、物

途端

引力

と物とはすべてこの力があつて、互に引き合つて居るのであらう。あの多くの星も、月も、皆地球の方へ引つぱりつけられて落ちて來なければならぬのに、そんなことは無い。月も、太陽も、亦多くの星も、大空に浮かんで居られるのは、この引力によつて、互に具合よく引つ張り合つて居るのだ。それで互にその居所なり、廻る路などが定まるのに違ひあるまい。」と考へつきました。

そして、ニュートンは、その得意な數學の力で一々計算して見て、愈、自分の考の間違つてゐない事を確めました。科學界を驚かした有名な「萬有引力の法則」はかうして發見されたのであります。

萬有引力
すべての物體が
互に引き合ふ力

偶然

ニュートンは、西曆一六七三年、三十二歳の時に、この法則を完成して居ましたが、その後十四年も經つて、西曆一六八七年に、始めてこの研究を世に發表しました。一寸した出來事をも見逃さないで研究したために、こんな自然界の大法則を發見する事が出來たのであります。

併し、大發明・大發見は、決して偶然に出來るものではありません。そこには、人知れぬ細心の用意と、血のにじむやうな苦心と努力とが潜んで居る事を忘れてはなりません。

ニュートンの、この大發見に對して、ある人が「ポトンと落ちたたゞ一つの林檎の實から、よくもまあ、あんな大き

動機
運行

な法則が発見されましたね。」と尋ねましたら、彼は「いや、落ちる林檎を観たのが、法則発見の動機ではありません。私は天體が無難に運行を續けてゐることに就いて、深い疑問を抱き、それについて、長い間、絶えず研究を續けて居りました。法則を発見することの出來たのは、この長い年月の間、私の頭から離れなかつた疑の心と、そのわけを知りたいと思つて、努力を續けたお蔭です。落ちる林檎を観て、唯「あゝさうだ。」と氣がついただけです。」と言つて、その苦心を物語つたといふ事であります。

〔少年ニュートン傳に據る〕

夏目漱石

名は金之助
東京市の人
文學者
大正五年歿
年五十

我が輩
猫自身を指す

一〇 猫の失敗

夏目漱石



夏目漱石肖像

今夜こそ鼠を捕つて、家ちゆうを驚かしてやらうと決心した我が輩は、宵のうちから臺所に陣取つて、鼠の出るのを待つてゐる。あたりはしんとして、ゆうべのやうに柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でことくと音がしだす。小皿の縁を足で抑へて、中を荒してゐるらしい。ここから出るわいと穴

すくむ

三寸
凡そ九糶

暴行

舞蹈會

山出し

の横にすくんで待つてゐる。なか／＼出て来る氣色はない。皿の音はやがてやんだが、今度はどんぶりか何かにかゝつたらしい。重い音が時々ごと／＼とする。しかも戸を隔ててすぐ向側でやつてゐる。我が輩の鼻面と距離にしたら三寸も離れてをらん。時々はちよろちよると穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて、一匹も顔を出すものはない。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、我が輩はじつと穴の出口で待つてをらねばならん。随分氣の長い話だ。鼠は椀の中で、盛に舞蹈會を催してゐる。せめて我が輩のはいれるだけ、おさんがこの戸を開けておけばいゝのに、氣の利かぬ山出

しだ。

竈(ヘツツヒ)
鮑貝(アヘビ)
猫の食器にあて
てあるもの

金盃

先天的

今度は竈の陰で、我が輩の鮑貝がことりと鳴る。敵はこの方面へも來たなと、そうつと忍び足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。暫くすると、風呂場でうがひ茶碗が金盃にかちりとあたる。今度は後だと振り向く途端に、五寸近くある大きな奴が、ひらりと齒磨の袋を落して縁の下へ駈けこむ。逃すものかと續いて飛び下りたら、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは、思つたより難しいものである。我が輩は先天的に鼠を捕る能力がないのか知らん。我が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈け出し、戸棚

頑張る
小癩

を警戒すると、流しから飛び上り、臺所の真中に頑張つてゐると、三方面とも少しづつ騒ぎたてる。小癩といはうか、卑怯といはうか、到底彼等は君子の敵ではない。我が



筆石漱 猫

心(シン)

小人

敵愾心

輩は十五六回はあちらこちらと氣を疲らし、心を勞らして、奔走努力して見たが、終に一度も成功しない。残念ではあるが、かういふ小人を敵にしては、いかなる名將も施すべき策がない。初は勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯と

八方睨

輕蔑

いふ崇高な美感さへあつたが、終には面倒と、馬鹿氣てゐると、眠いのと、疲れたのとで、臺所の真中に坐つたなり動かないことになつた。しかし動かないでも、八方睨をきめこんでゐれば、敵は小人だから大した事は出來ないのである。目ざす敵と思つた奴が、存外くだらない奴だと、戦争が名譽だといふ感じが消えて、憎いといふ念だけ残る。憎いといふ念を通り過すと、張りあひが抜けて、ぼうとする。ぼうとしたあとは、勝手にしろ、どうせ氣の利いた事は出來ないのだからと、輕蔑の極、眠くなる。我が輩は以上の徑路をたどつて、終に眠くなつた。我が輩は眠る。休養は敵中にあつても必要である。

風を切る

横向きに、庇を向いて開いた引窓から、烈しい風が吹き入ると思ふと、戸棚の口から弾丸のやうに飛び出したものが、避ける間もあらばこそ、風を切つて我が輩の左の耳に食ひつく。これに續く黒い影は、後に廻るかと思ふ間もなく、我が輩の尻尾にぶらさがる。瞬く間の出来事である。我が輩は何の目的もなく機械的にはねあがる。満身の力を毛穴にこめて、この怪物を振り落さうとする。耳に食ひ下つたのは、中心を失つてだらりと我が輩の横顔にかゝる。ゴム管のやうな柔かな尻尾の先が、思ひがけなく我が輩の口にはいる。究竟の手が、りに碎けよとばかり尾をくはへながら左右に振ると、尾だけは前齒

究竟(キヤウ)

揚板(アゲイタ)

の間に残つて、胴體は古新聞ではつた壁に當つて、揚板の上にはね返る。起き上るところを隙間なくのしかゝれば、毬を蹴たやうに我が輩の鼻面を掠めて、釣段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から我が輩を見おろす。我が輩は板の間から彼を見上げる。距離は五尺。その中に月の光が、大幅の帯を空に張るやうに横にさしこむ。我が輩は前足に力をこめて、やつとばかり棚の上に飛び上らうとした。前足だけは首尾よく棚の縁にかゝつたが、後足は宙にもがいてゐる。尻尾には、最前の黒いものが、死ぬとも離れまいといふ勢で食ひ下つてゐる。我が輩は危い前足をかけかへて、足が、りを深くしようとする

空(クウ)に

る。かけかへる度に尻尾の重みで、浅くなる。二三分すべれば落ちねばならぬ。我が輩はいよ／＼危い。棚板を爪で搔きむしる音が、がり／＼と聞える。これではならぬと左の前足を抜きかへる拍子に、爪を見事にかけて損じたので、我が輩は右の爪一本で棚からぶらさがつた。自分と尻尾に食ひつくものとの重みで、我が輩の體がぎりぎり廻る。この時まで身動きもせず、狙をつけてみた棚の上の怪物は、ここぞと我が輩の額を目かけて、棚の上から石を投げるやうに飛び下りる。我が輩の爪は一縷のかゝりを失ふ。三つのかたまりが一つとなつて、月の光を豎に切つて下へ落ちる。次の段にのせてあつ

一縷(イチル)

摺鉢

死物狂

胴間聲

手持無沙汰

た摺鉢と、摺鉢の中の小皿と、ジャムの空罐が、同じく一かたまりとなつて、下にある火消壺を割つて、半分は水甕の中、半分は床の間の上へころがり出す。すべて深夜に、ただならぬ物音をたてて、死物狂の我が輩の魂をさへ寒からしめた。

「どろばう」と主人は胴間聲を張り上げて寢室から飛び出して来る。我が輩は鮑貝の傍におとなしくしてうづくまる。二匹の怪物は戸棚の中へ姿を隠す。主人は手持無沙汰に、「何だ、誰だ、大きな音をさせたのは」と怒氣を帯びて、相手もゐないのに聞いてゐる。月が西に傾いたので、白い光の一带は半切ほどに細くなつた。(漱石全集)

眞鍋嘉一郎

東京府の人

醫學者

東京帝國大學教

授

英語の先生

夏目漱石のこと

諸記

英語の先生なのに、紋付袴で學校へ出てくるなんて第一をかしい。一度うんと質問して見ようと言ふので、私は一所懸命辭書を諸記して教場へ出た。

「先生。」

と大きな聲で呶鳴つてから、

「それは違ひます。辭書にかう書いてあります。」

とやると、夏目先生は、

「辭書が間違つてゐるのだ、直しておけ。」

とあべこべにやつつけられた。理窟は向ふにあるのだ

呶鳴る

恐縮

から仕方がない。恐縮して居ると、早口に英語をべらべらしやべつて、

「眞鍋君、今の通り言つて見ろ。」

と言はれる。どうも先生のやうにはうまく出來ない。

「あまり早くて分りませんから、もう少しゆつくりやつて下さい。」

と言ふことを、まる出しの國言葉でいつたら、先生は後でその儘「坊ちゃん」の中へ書いてしまはれた。

「先生はえらい。」

と思ふと、私はすぐさま先生の下宿へ出かけて、

「靴でも何でも磨きますから、書生に置いて下さい。」

坊ちゃん

漱石作の小説

明治三十九年成

願望

異名

抑揚

スケッチブック
米國の文學者
ウォシントン
アービング(二七
三八五九) 作の短
篇集
麗句
滅法
解剖

と御頼みした。先生は、「よし、おいてやる。」と引き受けてくれたが、間もなく他の先生と共同生活を始められたので、私の靴磨きの願望は叶はなくなつた。小説「坊ちゃん」が有名なので、坊ちゃんが夏目先生の異名のやうに聞えるが、先生は「坊ちゃん」の主人公とはちがつて、いつも落ちついて上品で静かであつた。黄色い聲ではあつたが、少し氣取つた抑揚をつけて、スケッチブックなどを講義すると、寶玉の如き麗句が口をついて出るので、思はず聞きとれてしまふ。だが講義は滅法やかましかつた。文章を細かく解剖して、一字一句も決してゆ

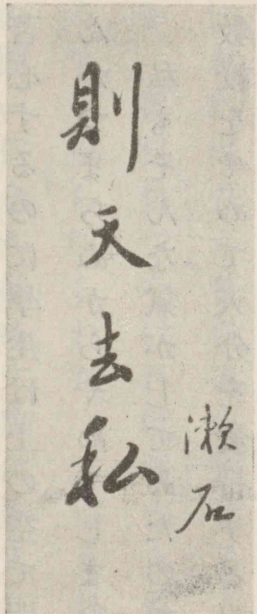
筆蹟

漱石
則天去私

ろくでなし

墮落

本郷通り
東京市本郷區
東京帝國大學の
ある通り



漱石筆蹟

るがせにしない。先生の講義を聞いて英語の奥深い味がはじめて解つた。

その頃から、私は、夏目先生は今に文學博士になつて、日本一の大學教授になるだらうと信じてゐた。大學教授をやめて小説家になられた

時には、「小説を読む奴はろくでなしだ。」と思つてゐた私は、先生も墮落したものだなと情なくなつた。そして先生への敬慕の念が、足元から崩れてしまつた。本郷通りで、「吾が輩は猫である」の立看板を見たときは、涙がぼろ／＼

吾が輩は猫であ
る

漱石作の小説
明治三十七八年

頃の作

立看板

大學

東京帝國大學

上の空

出て仕方がなかつた。道で會つた先生から「遊びに來い。」
と言はれても、憤慨して居た私は、頑として行かなかつた。
その後、私が洋行から歸つて、大學で無給のやつとこ講
師をしてゐると、先生は「教授は一時間の講義に二三日も
苦心するのに、學生は上の空で聞きながす。大學教授な
んかつまらぬからやめてしまへ。」と忠告された。

私もそんな氣がしてゐたので、この一言で先生が大學
教授をやめて、天分を發揮する自由の境地を求められた
氣持がわかり、「先生はやつぱりえらい。」とまた信仰心を取
返して、二度目の降參をした。

委(ユダ)ねる

先生が病氣になられた時は「吾が輩の生命は君に委ね

宮本博士
宮本
叔
醫學博士

後見付

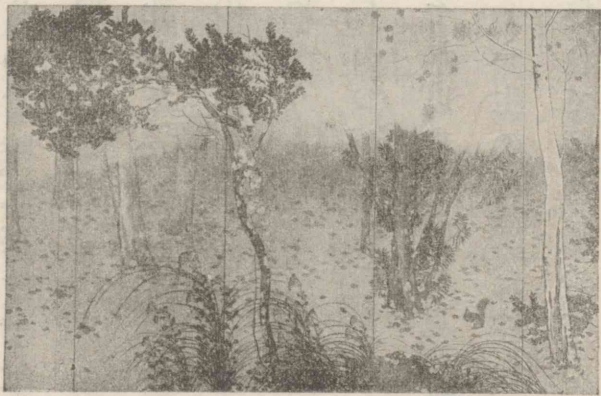
る。」と一切を任せられた。しかしその當時、私だけでは世
間が承知しないので、先輩の宮本博士などと呼んでくる
と、先生は怒つて、「吾が輩が生命を託して安心してゐるの
に、君には吾が輩の君に對するこの信賴の心が解らぬの
か。」後見付でなければ脈がとれぬやうなら、醫者をやめ
ろ。」と頭から叱られた。だがうれしかつた。醫者として
の固い信念が始めて胸に燃えて、それ以來、私は「後見付」の
治療は、一切御免蒙ることにした。一生の感激だつた。
先生の脈をとる私の心配顔を悟られてはと、眠つてゐら
れる間に、こつそり診察したほどの心づかひも、先生に對
するさゝやかな感謝の心からであつた。(世界人の横顔)

島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

一一 落葉

島崎藤村

十一月に入つて急に寒さを増した。朝起きて見ると、一面に霜がおりてゐて、桑畠も野菜畠も家の屋根も皆白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋もれるばかりであつた。すこしも風はない。それで居て一葉二葉づつ静かに地に落ちる。屋根の上の方で鳴く雀も、いつも



筆山周田飛

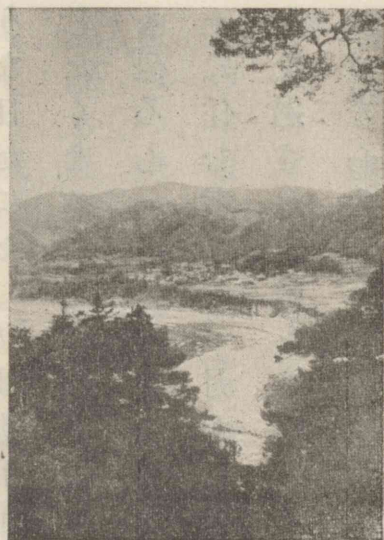
秋 晩

この山
長野縣北佐久郡
小諸町の附近
冬籠

より高くいさましさに聞えた。空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に、凍えた両手をかざしたくなつた。足袋をはいた爪先も寒くしみて、いかにも恐ろしい冬の近よつて來ることを感じた。この山の上に住む者は、十一月から翌年の三月まで、殆ど五ヶ月の冬を過さねばならない。その長い冬籠の用意をしななければならぬ。

木枯が吹いて來た。十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押し寄

せて来る様な音に驚かされて眼がさめた。空を通る風の音だ。時々それが静まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。殊に南向の障子には



千曲川の河音も平素から見るとずつと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞ひ込んで来る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であったが、裏の流のところ立柳などは、烈風に吹かれて髪

枯れぐ

を振るやうに見えた。枯れぐとした桑畠に茶褐色に残つた霜葉なども、左右に吹き靡いてゐた。

その日、私は学校の往きと還りとし、停車場の前の通りを横切つて、眞綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭を冠つて両手を袖に隠した女だのが行き過ぎるのに遇つた。往來の人々は何れも鼻汁をすゝつたり、眼縁を赤くしたり、あるひは涙を流したりして、顔色は白つぽく、頬・耳・鼻の先だけは赤くなつて、身を縮め頭をかがめて寒さうに歩いてゐた。風を背後にした人は飛ぶやうで、風に向つて行く人は又力を出して物を押すやうに見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木

撓む

枯が野山を吹きまくる光景は、凄まじく、烈しく、又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は撓み、幹も動搖し、柳竹の類は草のやうに靡いた。柿の實で梢に残つたものは吹き落された。梅・李・櫻・榛・銀杏等の霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこに集まつた落葉が、風に吹かれては舞ひ揚つた。かうして急に山々の景色は淋しく明るくなつた。 (藤村女子讀本)



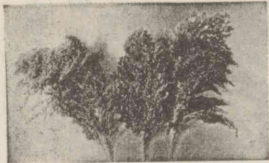
筆觀大山横 葉落

鳥居きみ子

徳島縣の人
文學博士鳥居龍藏氏夫人

高粱(カヤ)

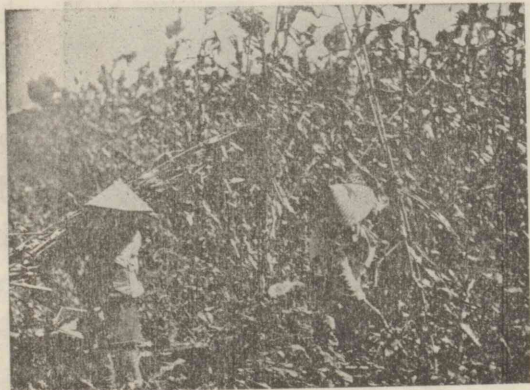
もちこしきび
莖の高さ三米に達する



一三 滿洲の生活

鳥居きみ子

滿鐵沿線だけを、汽車の窓から見たばかりではあるが、見渡す限り高粱畑の續いてゐるのに驚かされる。これが爲に夏から秋にかけて、沿線を離れて奥地へ進むことは、非常に危険であるといふ。それは人の丈以上に伸びた高粱を利用して、馬賊が出没するためである。秋の終りに高粱を刈り入れて、遠方迄見通し



畑 梁 高

玉蜀黍(タウモ)
 (ロコシ)
 器粟(ケシ)
 高さ一米位
 花の色は紅色・
 紅紫色・紫色等
 種々ある



がきくまで、旅行者は大いに警戒しなければならぬ。高粱は滿鐵沿線の主要農作物で、この外には玉蜀黍・大豆・粟・蕎麥・器粟・麥などを栽培してゐる。又、近來は水田が多くなつて來たやうで、主に朝鮮人が、米を作つてゐる。滿鐵沿線に住む中流以上の家庭では米食が多くなつたといふ。日本人の中にはこの滿洲米を食してゐる人も多い。色は黒いが味はよいと思つた。滿洲國人の中流以下の常食としては高粱がある。高



刈取りつた高粱畑

高

饅頭(マユン)
 (ヂユウ)

遼陽發掘
 筆者は夫に従ひ
 滿蒙地方の考古
 學研究に赴き遼
 陽の古蹟を發掘
 した

苦力(クリー)
 人夫・人足

醸造

高粱の粉で饅頭の様に蒸した餅を作り、その温かい中に生葱などを噛りながら食べるのである。かくて滿洲國人の下層社會では、一日の食費十錢を出ないとのことである。そして彼等は、終日を忠實に倦むことなく働き續けて、得た賃金は、多く貯金するやうに努めてゐる。私どもが遼陽發掘で雇つた苦力は、皆近邊の人たちで、日本人に使はれてゐた者ばかりであつた。この人たちは何れも無邪氣な、かはい、性質を持ち、眞面目によく働いてくれた。そして苦力はしてゐるが、皆相當の貯もあり、豊かに生活してゐる者であつた。

高粱の用途は非常に多いが、まづ高粱酒を醸造するこ

とがその第一であらう。満洲國人は十中八九までが、高粱酒を嗜むと言つてもよい位である。最上の高粱酒は強い酒精のやうに燃える。この地に永住してゐる日本人間にも、よくこの高粱酒を飲んでゐる人を見た。支那料理に高粱酒は調和のよいものらしい。満洲國人の御馳走におよばれすると、その客人をもてなすことの巧なことに驚く。そして客人は思はず盃を重ねてゐるのである。酒も高粱酒ばかりではなく、色々の支那酒がある。

高粱穀は筵（タタミ）に編まれて、床の上に敷かれることは、日本の畳と同じである。屋根にも葺かれるし、その他色々の

温突（チンドル）
床下に仕切を造つて火氣を通じ部屋を温める装置

鱸（スズキ）
鮪（マグロ）

容器にも作られ、残されたものは皆燃料とされる。満洲の家屋の温突は、高粱穀十本一束のもの二三束あれば十分で、床は心地よく暖められる。

高粱に次いで眼にはいるものは大豆である。その他、粟がよく實つてゐる。粟飯も高粱飯に次ぐ常食である。粟の用途もかなり多い。

副食物には野菜と牛豚肉・魚肉がある。大連では色々の魚がとれるし、内地からも来る。多く鯛・海老・鱸・鮪の類



満洲國の家庭

海鼠(ナマコ)
鱧の鱗(フカの
ヒレ)

菠薐草(ハウレ)
(ンサウ)

を見た。これらの魚は、鐵道便で沿線の驛々に送られて
来るから高價である。冬期は魚も皆凍つてゐる。無論
肉も鋸で挽かねばならぬ様に凍るのである。支那料理
に用ひられる椎茸、乾海老、筍、海鼠、鱧の鱗その他罐詰類は
皆内地から來てゐる。滿洲では鯉、鮒その他の河魚があ
るが、中にも鯉料理は非常においしい。

野菜は實に豊富によく出来る。瓜類をはじめ、葱、人參、
大根、白菜、菠薐草、芋類など盛に栽培されてゐる。日本人
も農場を持ち、多くの滿洲國人の農夫を使用して大々的
にやつてゐるのを大分見受けた。かういふ方面の仕事
は皆成功して居るといふことである。(滿蒙を再び探るに據る)

田山花袋

名は録彌
群馬縣の人
昭和五年歿
年六十

廣重

安藤廣重
浮世繪の畫家
安政五年歿
年六十二

川崎

神奈川縣川崎市
六郷
多摩川の下流
東海道舊渡船場

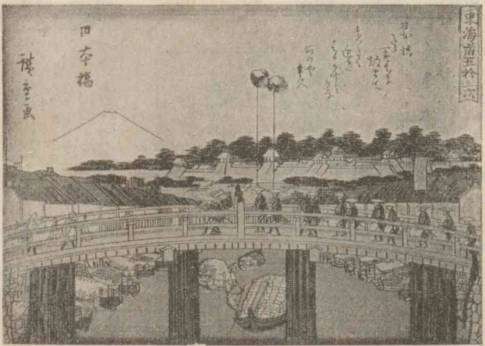
程ヶ谷

横濱市程ヶ谷區

一四 東海道の富士

田山花袋

昔の五十三次の道中、双六や廣重の繪などに現れてゐ
る富士の姿は面白い。その起點の
日本橋の背景が、すでにその白扇で
塗られてある。川崎の手前の六郷
の渡あたりにも、相模丘陵を前にし
て高く聳えて居る。併し富士の姿
の始めて相對してゐるのは、程ヶ谷
の先の信濃坂の上の茶屋であつた。
當年の旅客は、日毎にその姿の近くなつて行くのを樂し



廣重筆

日本橋の富士

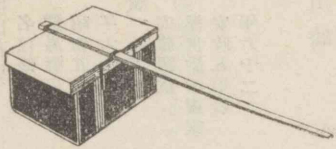
みにしつづ、草鞋・脚絆で歩いて行つたのであつた。

箱根山中で見える富士は、種々に形が變つて描かれてある。時には駕籠と雲助の毛脛とを添景にして

かき、時には關所と槍とを前に置いてかき、又は湖水と相映對させ

てかき、時には武士と挾箱とを取合せてかいてある。三島から沼津及び薩

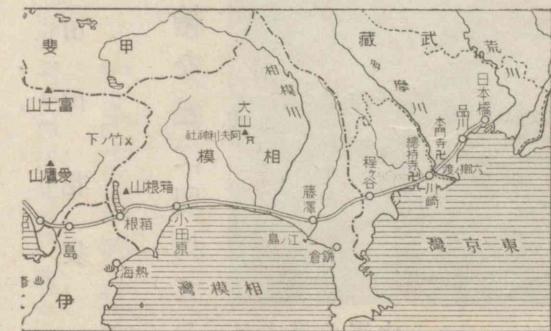
添景 映對 挾箱 道中で從僕に擔はせた箱



三島 静岡縣三島町



筆重廣 士富の峙埤薩



薩埤峙 静岡縣庵原郡 興津の東北にあたり舊東海道難所の一

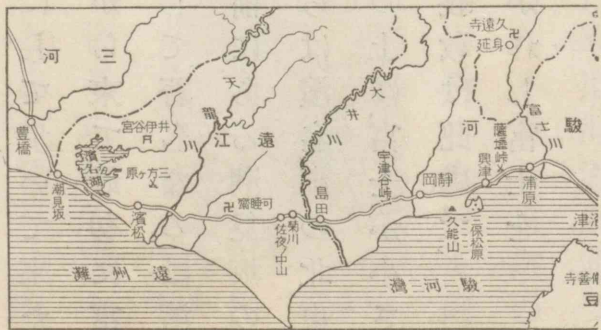
埤峙へかけての眺望が最もよく、昔の旅客は皆笠を傾けたり、首を廻らしたりしてそれを仰いだ。併し興津以西は、今までとは反對に、遠く小さくなつて行く富士が描かれてある。實際今

蒲原 静岡縣蒲原町

通つて見ても、蒲原のトンネルを向ふに抜けると、もう富士とは縁が遠くなつて行くのを感じる。

島田 静岡縣島田町

静岡・島田邊りで見えた富士は、もう餘程小さい。富士川以西の丘陵にその半ばは遮られてゐる。それでも大井川の輦臺渡には、やはりその背景に富



輦臺 (ワタシイ)

上方(カミガタ)

潮見坂
静岡縣濱名湖の西

足利義教
義満の子
室町幕府第四代
の將軍



大井川の葦臺渡

廣重筆

士が畫いてある。

上方から江戸に向つて来る者も、やはりこの富士を眺める事を楽しみにして歩いて来たに相違ない。西から来て、最初に富士を望む地點として著名なのは、濱名湖畔の少し手前にある潮見坂の北東觀音だ。其處からは濱名湖の北東部を繞つた丘陵の上に、富士が小さく見える。足利義教は此處で、
今ぞけふ願滿ちぬる潮見坂心ひかれし富士をながめて

關聯

菊川
静岡縣金谷町菊川

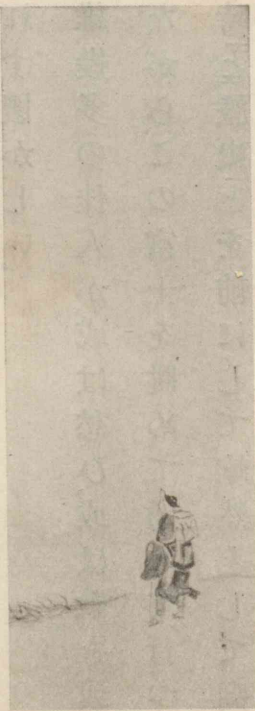
吉野朝の忠臣
藤原俊基
業平朝臣

在原業平
平安朝時代の歌人

竹の下
静岡縣駿東郡足柄村

西行
俗名佐藤義清
歌僧
建久元年歿
年七十三
衣が浦
愛知縣渥美灣の別名

といふ歌を詠んだ。それに關聯して、古來、東海道を通つて行つた歴史上の人達の事蹟が考へられるのも、自然の順序である。菊川の里に歌を留めた吉野朝の忠臣も、例の東下りの路を處々に残した業平朝臣も、竹の下の一戦で敗れて退いた義貞も、其他信玄も、秀吉も、家康も、皆この路を通り、東海の富士を仰いで、鎌倉乃至小田原へと志して行つたのである。西行に富士見西行の名のあるのも面白い。長く海中に突出して、内に風光明媚な衣が浦を包んだ



富士見西行 橋本雅邦筆

伊良湖崎
渥美半島の西端
一里
約四軒

越戸
愛知縣賀茂郡上

郷村

日和山
三重縣鳥羽町の

北西方

端麗
髣髴

屹然

雲表

渥美半島では、伊良湖崎の東一里にある越戸の大山の上から、鮮かに富士の姿が眺められる。それは丁度海を越した志摩の日和山から眺めた形と同じであるが、さうした絶海の畔に、思ひもかけずその端麗な姿を髣髴し得たのは、何とも言はれず懐かしい。

古來幾多の英雄、幾多の佳人が、或は愁ひ、或は歎き、或は樂しみ、或は喜びながら、この富士を眺めて通つて行つたのを思ふと、私は「時」と「歴史」とを前にして、屹然として高く雲表に聳えてゐる山の姿に憧れずにはゐられない。夥だしい變遷だ。今は飛行機がその半腹の空を掠めて行く。(山水小記)

西條八十
東京市の人
詩人

一五 富士の歌

西條八十

拜(チロガ)む

遠祖先(トホツミ)
(ミチヤ)

情操(ココロ)

大和島根の蒼空に
聳えてたかき富士が嶺よ、
わが父母も拜みぬ、
遠祖先も拜みぬ。

われら尊きこの峰に
高き理想を授けられ、
われ等消えざるその雪に
清き情操を學びたり。

象(カタド)る

外国人(トツク
ニビト)

靈峰

大和島根の民草の
心象る富士が嶺よ、
外国人もふり仰ぐ
日出づる國の靈峰よ。

その名を負ひて生まれたる
われらに高き使命あれ、
その名を負ひて歩みゆく
われらに強き力あれ。

(少年詩集)

茅野雅子
大阪市の人
歌人

浅川驛
中央線に沿ふ驛
東京府南多摩郡



はおる

小砂利

背光

一六 多摩御陵参拜

茅野雅子

浅川驛に着いた頃から、天氣は愈晴
れて來ました。御陵の前の大通りを
歩く時分には、はおつて來た羽織が、う
るさいくらゐの暖かさでした。
葉が落ちて骨ばかりになつた街路
樹は、くつきりと濃い影を路上の小砂
利の上に投げ、遠く遙かに見える浅川
橋の白く塗られた欄干からは、背光の
やうな輝きが、さつと廣がつてみました。



多摩御陵参拜道

東京を出てほ

車止

んの少しの時間で、かうした静かな爽かな空氣に接する事が出来たのを喜びながら、美しく流れてゐる浅川の水を見て橋を渡ると、車止のある大きな廣場へ出ました。

清楚

愈、御陵地域だと思ふと、何となく張り詰めた、そして、つつましやかな心持にならずにはゐられませんでした。右手に岩を疊んだ地を眺め、左手に清楚な御休憩所を見て、長くく、續く爪先上りの参道を登りました。木の葉一つ落ち散つてゐないこの清淨な参道を挟む稍、高くなつた兩側の傾斜には、大方常磐木が茂つてゐますが、その中、紅葉した木の立ちまじつてゐるのも、またとない趣でした。澄んだ空氣が一層澄んで行くのを覺える頃、一段

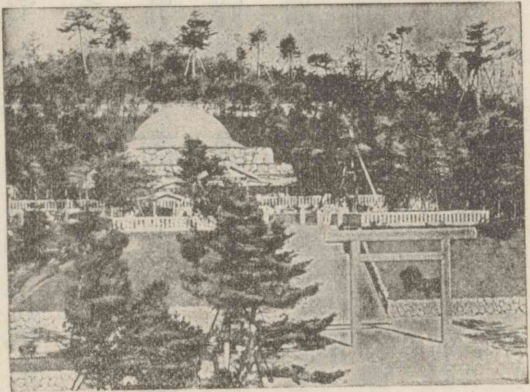
常磐木

階(キザハシ)

高く深く蒼く輝く常磐木の森に囲まれた丘腹に、石の階

御靈(ミタマ)

御手洗(ミタ)



が見え、玉垣が見え、尊くも畏い大正天皇の御靈を鎮め奉つた御陵多を仰ぐ事が出来ました。傍の御摩手洗には清水が溢れ落ちて、静かな音を立ててゐます。

私は玉垣の前に立つて、近く拜む御陵の神々しさに、思はず頭が下り、息づまるのを覺えました。

かたじけなさに
何事のおはしま
すかは知らねど
もかたじけなさ
に涙こぼるる
(西行法師作)

西行が「かたじけなさに涙こぼるる」と詠んだ歌の心を、今しみぐと感ずるのでした。眞晝の光は白い砂と蒼い

反映

まさぐ

そのかみ

感銘

もだす

まさめ

樹木とに反映して、一きは明るく、神々しい気がしました。申すも恐れ多い事ですが、私は大正天皇がまだ皇太子でゐらせられた時、京都の御苑内を、勿體なくも腕車に召されて御通過遊ばされた御英姿をお見上げ申した時の事を、まさぐと思ひ出したのでした。そして人間らしい愚かな心で、そのかみの天皇をおしのび申し上げて、一層深い感銘を覚えながら、もとの路を引き返しました。手を洗ふ清水あふるる音きこゆ皆もだしつつ、かしこまりをれば、おほみ墓まさめにちかく仰ぎつつ何の心ぞ涙たまり來。

吉村冬彦

本名寺田寅彦
高知縣の
理學博士
昭和十年歿
年五十八

一七 子猫を飼ふ

吉村 冬彦

車座
環視
顛
沸騰

ある日仕事をしてゐると、子供が呼びに來た。猫を貰つて來たから見に來いといふのである。行つて見ると、もうかなり生長した三毛猫である。大勢が車座になつて、この新しい同居ものの一舉一動を、好奇心に満ちた眼で環視してゐるのであつた。猫に關する常識のない私には、すべて唯珍しい事ばかりであつた。妻が抱き上げて顛の下や、耳の周りを搔いてやると、胸のあたりで物の沸騰する様な音をたてた。猫が咽喉を鳴らすとか、ごろ／＼いふとかいふことは、書物や人の話で

徴候

腑に落ちる

知つてゐたが、實驗するのは四十餘歳の今が初めてである。これが喜びを表す徴候であるといふことは、初めての私にはすぐにはどうも腑に落ちなかつた。「この猫は肺でも悪いのではないか」と言つたら、ひどく笑はれてしまつた。實際今でも私には、果して咽喉が鳴つて居るのか、肺の中が鳴つて居るのか分らない位である。この音は私に色々な事を聯想させる。海の中にもぐつた時に聞える、あの波打際の砂利の相磨する音や、火山の噴火口の奥から聞えて来る釜のたぎる様な音なども思ひ出す。若し獅子や虎でも同じやうな音を立てるものだつたら、この音は一層不思議なものでありさうである。それが

聯想

類似

聞いて見たい様な氣もする。疊の上へおろしてやると、もうすぐ其處にある紙片などにじやれるのであつた。その舉動はいかにも輕快で、さうして優雅に見えた。人間の子どもなどでは、とても自分の身體をこれだけ優雅に取扱ひ得ようとは思はれない。それで居て、一舉一動が如何にも、子ども子どもしてゐるのである。人間の子どもの、子どもらしさと、何處と明らかに名狀し難いが、著しい類似がある。もとの飼主の家では、よほど大事にして育てられたものらしい。食物なども中々めつたなものは食はなかつ

贅澤

愛着

一脈

た。牛乳か魚肉、それもいゝ處だけで、堅い頭の骨などは食はうともしなかつた。恐ろしい贅澤な猫だといふものもあれば、上品だと言つて褒めるものもあつた。膳の上のものを狙ふやうなことも決してないのである。子どもらの猫に對する愛着は、日増に強くなるやうであつた。學校から歸つて來ると肩から鞆をおろす前に、「猫は」「三毛は」と聞くのであつた。私は何となしに寂しい子供らの生活に、一脈の新しい情味が通ひ始めた様と思つた。幼い二人の姉妹の間には、屢猫の爭奪が起つた。「少しわたしに抱かせてもいいゝぢやないの。」とか「ちつともわたしに抱かせないんだもの。」とか言ひ争つて居るのが、

威(オド)かし

離れた私の部屋まで時々聞えて來た。しまひにはどちらかが泣き出すのである。あんまりいちめると、もう何處かへやつてしまふとか、もとの家へ返してしまふとかいふ威かしの言葉が、子どもらの前で繰り返されて居た。それでもあんまりうるさく奪ひあふので、とう／＼元の飼主の家へ頼んで、一兩日靜養させて貰ふことにした。猫が居なくなると、家の中が急に寂しくなつたやうな氣がした。折から降りつゞいた雨に、庭へ出ることも出ない子どもらは、何時になくひつそりして居た。いつも、夜、子どもらが寢靜まつた後に、どうかすると足

音もさせないで書齋へやつて来て、机の下からそつと私の足にじやれつくのを、抱き上げて膝へのせてやると、すぐ例のごろくといふ音を出すのであつたが、その夜はもとより居ないのだから来るはずはなかつた。仕事に済んでゆつくり煙草を吸ひながら、静かな雨の音を聞いてゐる中に、妙な想像が浮かんで来た。三毛がほんたうに何處かへ捨てられて、この雨の中を濡れそぼちながらさまよひ歩いてゐる姿が、心に描かれた。餓と寒さに顫へながら何處かの塵芥箱のまはりをうろくしてゐて、さうして知らない人の家の雨戸を洩れる燈火を戀しがつて、哀な聲を出して鳴いて居さうな氣がした。

濡れそぼつ

顫(フル)へる

待遇

野良猫

躑躅(ツツジ)

翌日の夕方迎へにやつて、連れて来たのを見ると、たつた二日の間に見違へる様に肥つて居た。尖つた顔がふつくりして、眼が急に細くなつたやうに見えた。眼のまはりにあつた神経質な皺は消えて、おつとりした表情に變つてゐた。どういふ好い待遇を受けて来たのだらうといふのが問題になつた。親の乳でも飲んだためだらうといふ説もあつた。

夏も盛りになつて、夕方になると皆が庭へ出た。三毛も一しよについて来た。嘗て野良猫の遊び場所であつた躑躅の根元の少し窪んだ處は、やはり何かしら、どの猫にも氣に入ると見えて、ボールを追つかけなどして駆け

熊笹

竹の一種で高さ
二米位



もんがあ

「むささび」の異
種形は「りす」に
似てそれよりも
大きい



恰好(カッコウ)

廻る途中、きまつた様に其處へ駆けこんだ。さうして餌を狙ふ猛獸のやうな姿勢をして、拔足で出て来て、いよいよ飛びかゝる前には、腰を左右に振り立てるのであつた。どうかすると、熊笹の中に隠れて長い間ちつとしてゐると思ふと、急に鯉の跳ね上るやうに高く飛び出して、さうしてきよとんとしてとぼけた顔をして居ることあつた。どうかすると四肢を兩方に開いて腹をぴつたり芝生につけて、ちやうど「もんがあ」のとんで居るやうな恰好をしてゐること



などもあつた。腹でも冷して居るのではないかと思はれた。

芝を刈つて居ると、何時の間にか忍んで来て、不意に銚の先に飛びかゝるのが、危険でしやうがなかつた。注意しながら刈つてゐると、時々、猫が狙つて居ることを警告する子どもの叫び聲が聞かれた。この芝刈鉞に對する猫の好奇心の様なものは、ずつと後までも持續した。もう紐切れやボールなどにはじやれなくなつた後でも、銚を持つて庭に下りて行く私の姿を見ると、すぐについて來るのであつた。どうかすると、しやがんで居る腰の下からそつと這入つて來て、私の兩膝の間に顔を出しなど

警告

持續

八手(ヤツデ)



蝦蟇(ガマ)
「ひきがへる」の
こと



舐める
舉動

した。さうしてちよつと鉢に觸れると、それで満足した
様にのそく、向ふへ行つて、植込の八手の下で蝶を狙つ
たり、蝦蟇にからかつたりして居た。
蝦蟇では一番初めに失敗したやうである。多分喰ひ
つかうとして、どうかされたものと見えて、口から白い涎
のやうなものをだらく、垂らしながら、兩方の前脚で、自
分の口をもぎとりでもする様なことをして、苦しんでゐ
た。蛙が煙草を舐めた時の舉動と、よく似たことをやつ
てゐた。それ以來は、もう口をつけないで、たゞ前脚で蝦
蟇の頭をそつと抑へつけて見たり、横腹をそつと押して
見たりしては、首をかしげて見てゐるだけであつた。愚

愚直

憤懣

帶地

直な蝦蟇は、さはられるたびに、しやちこばつて膨れて居
た。その土色の醜い身體が、憤懣の團塊であるかのやう
に見えた。絶対に自分の優越を信じて居るやうな子猫
は、時々脇見をしながら、又ちよいくと手を出してから
かつて見るのである。
じやれる品物の中でおもしろいのは、帶地を巻いてお
く桐の棒であつた。前脚でころがすのは何でもないが、
棒の片端をひよいと兩方の前脚でかゝへて、後脚で見事
に立ちあがる。棒が倒れると、それを飛び越えて見向き
もしないで、知らん顔をしてのそくと三四尺も歩いて
行つてちよこんと坐る。さういふことを何遍となく繰

籐椅子

り返す。どういふ心持であるのか全く見當がつかない。二階に籐椅子が一つ置いてある。その四本の脚の下部を筋違ひに連絡する十字形の真中が、ちよつとした棚の様になつてゐる。此處が三毛の好む遊び場所の一つであつた。何か紙片のやうなものを下へ落しておいて、入り亂れた籐のいろ／＼の隙間から前脚を出して、その紙片を捉へようとする。轉り落ちると仰向になつて、今度は下からその隙間へ脚を代る／＼挿しこんだりなどする。

この様な遊戯は何を意味するか吾々にはわからない。恐らく、まだ自覺しない將來の使命に慣れる爲の練習を、

無意識

無意識にしてゐるのかも知れない。

月が冴えて、風の静かなこの頃の秋の夜に、三毛は縁側の蹈臺になつてゐる木の切株の上に、背中を圓くして行儀よく坐つてゐる。さうしてひつそりと静まり返つて月光の庭を眺めてゐる。それをちつと見てゐると、何とはなしに幽寂といつた様な感じが胸に浸みる。さうしてふだんの猫と違つて、人間の心で測り知れない別の世界から來て居るものの様な氣のすることがある。

この様な心持は、恐らく他の家畜に對しては起らないかも知れない。(冬彦集)

幽寂

黒田米子
登山家

一八 スキーの旅

黒田米子

小屋 福島縣一切經山の下の原にある
筆者の一行七名は五色巖山のスキー登山に出かけ一切經山を越えて正午この小屋につき更に東吾妻山に向ったのである
荒涼
地表

うらゝかな晴天が私達を元氣にさせ、山越えして來た疲れもなくなり、二時十分に小屋を出ました。原をぬけて山裾へ取り着くと、はじめ暫くは、煤煙に枯死した立木が荒涼として續いてみました。登りゆくに従つて、火口湖らしいものも見え、凹凸の地表が次第に廣がつてゆきます。



藏王(ザウウ) 藏王山
宮城縣の西南にある火山
高さ一八四一米
吾妻不二
二三頁地圖参照



(山形家)

かつて藏王の山頂から眺めた吾妻不二が、ここでは一つのこぶくらゐにしか見えないのに驚かされます。やがて林に入りました。樅や檜が大樹になり、それに雪がこんもり被さつてゐる姿の美しさ、まるでお伽の森の深い新雪を登るやうです。その爲に道もはかどり、ぐんぐんと近くの山を下にして行きます。お化けのやうに白衣を被つて、ぬうつと立つ樹々の間を縫つて、男とも女と

も見分けのつかぬ私達黒衣の一隊は、黙々と登つてゆきます。その異形の姿を古人が見たなら、屹度、山の魔か、天狗かと怖れたらうと思はれます。

やがて少し雪曇りになつた寒さの中を、一行はやうやく頂上近くの處へ出ました。その積雪も凍結して樹氷の形を成してゐます。姫小松らしい疎林です。風が激しくて頬を刺すやうです。何といふ寒さでせう。急いで頂上の三角點の邊へ出て見ましたが、吾妻連峰の雄大な連りを展望しようとの期待は、憎い夕雲に遮られ、視界は空々漠々たる雲ばかりです。

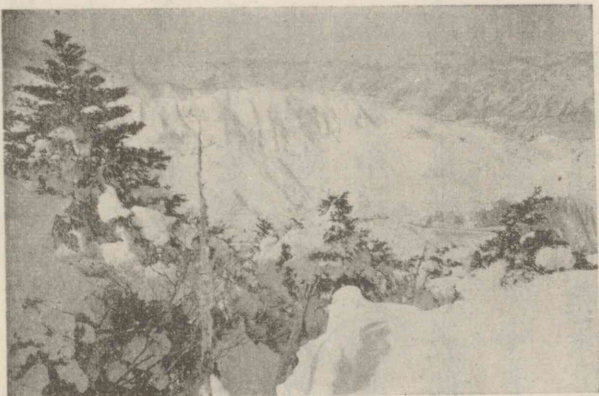
三時四十分、早い登りでしたけれど、もう雲が來ても仕

頂上
東吾妻山の頂上
高さ一九七五米

三角點
三角測量に用ひ
る目標

空々漠々

滑降
躊躇
ターン
轉回
辟易



(む畧を面万澤米)

峰連山妻吾

方のない時間です。足踏みして寒氣と闘ひながら四時まで待ちましたが、遂に晴れないので山を降り始めました。粉雪のばつくと飛ぶ樹氷の疎林を滑降するのは面白いものです。併しやがて大樹の密林へ入ると、かつて樹にぶつつかつた苦い經驗のある私には、その滑降は何となく躊躇されました。しかも雪はよく滑り、樹間は狭いので、小さいターンをしなければならぬには辟易しま

した。幾度か轉びつつ、やがて林をも抜ける頃には、夕闇が雪の傾斜を見えなくし始めました。

降りには、登りの割にのろくて、四十五分を要しました。やはり午前の山越えの疲れの爲でせう。小屋の中にはいると、急に眞暗で、雪の天地に馴れた眼には、暫くは何も見えませんでした。

荒れたとも、粗末とも、言ひやうのない小屋の、八疊敷ほどの一間に入つて、爐の火を盛にかき立てながら、私たち



冬山を行く

廢屋

闖入者

は濡れたものを乾かしたり、スキーの雪を拂つて、部屋近くの温か味のある場所へ置いたりしました。スキー地の乾燥場の設備のある小屋と違つて、ここではすべての物を凍らぬやうにする苦心が、一通りではありません。

「この前に泊つた時は靴をかじられた。」

「私はスキーの締め皮をやられた。」

などと廢屋へでも寝たやうに、鼠の多い話が出ます。障子の穴を持ち合せの紙で張るのも惨めですが、それよりも雪を溶かして造つた水しか無いのは、一層惨めです。併し小屋の人達は闖入者の私達を人懐かしげに喜び迎へて、忙がしい思をして、山の御馳走を作つてくれました。

團欒

味噌汁と牛蒡と兎の肉の煮ころがしとお漬け物。中
 も獲つたばかりの兎の味は、實に私達を元氣づけました。
 食後の團欒に、小屋の主を招き、兎撃ちの話の聞いたり、
 手製のスキーの相談をしたりして、質朴な空氣に浸つた
 のもいゝ心持でした。間もなく明るい部屋に積んであ
 ったごつ／＼のひやりと冷たい感じのする重い／＼蒲
 團を持ち出して、一行七人炬燵の周圍に寝る仕度をして
 もぐり込みました。堅い床に、寝返りも出来ぬ重い蒲團
 でしたが、それでも晝の疲れて、いつしか安らかな夢路に
 入つたのでした。(雪女性とスキーに據る)

炬燵(コタツ)

一九 動物園雜觀

靈鳥

鶴が日本の靈鳥として、古來より稱讚せられて居りま

すのは、既に皆様御承
 知のことと存じます。

そして非常に長壽を
 保つといふことも、こ
 の鳥を尊崇する一つ
 の原因をなしたも

の思はれます。

その鳴き聲は清朗で、これを聞けば心神自ら爽快を覺



鶴

丹原

丹原

尊崇

中

清朗

音頭

中天

えるものです。一羽の雄鶴が音頭を取るやうに、一聲高く鳴き始めると、雌鶴これに和し、其他の鶴も亦合唱するやうに相和して鳴き續けますから、その聲は遠く中天に響き、壯絶いはん方なしであります。

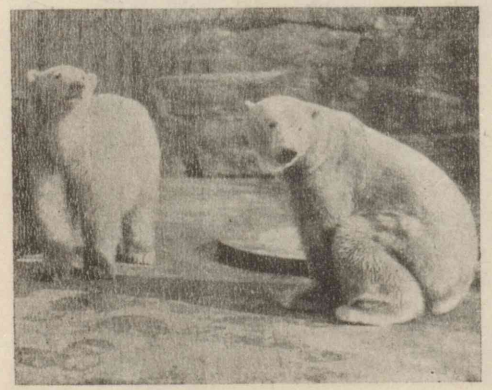
北極熊はその最も大きなものになりますと、時には約四メートルに達するものもあり、その體量は、中位のもので凡そ七百キログラムもあります。しかし氷原生活に馴れて居りますから、雪や氷の上での行動は自由自在です。可なり走ることにも出来、又水中にあつては游泳にも巧みで、よく遠距離を泳ぐことが出来ます。記録による

海里
一海里は約一八
五〇米

と、三四十海里位泳ぐのは何でもないとのことであり、流水に乗つて、二百海里も三百海里も平氣で旅行することもあるといはれてゐます。

ある人が、この北極熊について、甚だ面白い實例を擧げてゐます。

ある時、水夫等が北極地方の氷上で、一匹の牡熊を追撃したことがありました。ところがその熊は二匹の仔を連れて居りましたので、仔熊の歩みが遅い爲に、追ひつかれることを非常に心配して、絶えず周圍を見廻し、一種の動作と聲とで、その



北極熊

仔に早く走れといふ合圖をしながら、先に立つて駈けて
 行きました。併し到底駄目だと知るや否や、その子を擔
 つたり、後から押したり、或は一匹づつ交互に前の方に投
 げ出し乍ら駈けました。かうして足の遅い仔熊を助け
 て、遂に水夫等の追撃から完全に逃れ得たといふこと
 です。危急の場合に臨んで、こんな智慧の出ることは、その
 智力の進んでゐる證據でありませう。

カンガル―は大の運動家で、大カンガル―などは、それ
 は、見通しのつかないやうな廣い野原を、跳ね廻つて喜び
 ます。しかし元來が臆病者ですから、ものに驚くと高跳

臆病者

二間

約三・六米

雜作

鹽梅

びを致します。その時は、二間位の高さの所を、何の造作
 もなく跳び越します。そんな鹽梅に跳び越すと足
 跡の距離が二米以上にな
 るといふことです。

この動物はオーストラ
 リア大陸と、それに續いて
 ある島々に棲み、學問上、有
 袋類、即ち袋のある動物といふことになつてゐます。



— ル ガ ン カ

有袋類

河馬は夜行動物ですから、日中は多く水中に潛み、日没

寄生 啄む

後から食物を求める爲に、陸上に出て來ます。時によると、三時間も四時間も日光浴を貪ることがあります。河なり、湖なり、水から陸に出て來て、適當な場所で日光浴をして居ますと、多數の小鳥が集つて來てその身體に止まります。河馬が寢返りをして小鳥は少しも驚きません。一寸飛び立つばかりで、またその身體に止まります。小鳥は河馬の皮膚に寄生してゐる水棲動物を啄み搜してゐますから、河馬は口をあけて、齒の間に



河馬

護衛

狩獵

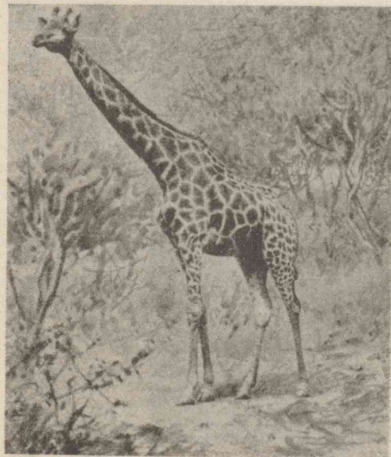
敏捷

寄生してゐる蟲まで啄み取らせて、一日を送るのであります。この小鳥について思ひ出すことは、河馬が日光浴をして居る間、河馬の爲には、常に護衛の役目をつとめてゐるといふことです。もと／＼河馬の眼は、強い光線のあるところでは、視力が乏しいので、若し河馬を狩獵する人とか、或は獅子のやうな猛獸が襲うて來るにしても、稍遠距離の間は、視覺の利用が出来ないから、敵の接近を急に知ることが出来ません。併し敏捷な小鳥の眼には、害敵の近寄るのが早くわかりますから、愈、河馬の身邊危しと見れば、群を亂して飛び立ちます。かやうにして、河馬ははじめて自分に害敵の近寄るもののあることを覺る

對照

と、急に身を起し、水中目がけて躍り込むといふことです。この、河馬の日光浴と小鳥との關係は、頗る面白い對照ではありませんか。

現在地球上に棲息する動物の中で、足の先から頭の上までの丈が一番高いのは麒麟で、外にこれと匹敵するものは居ません。亞細亞の南部に棲む鼠鹿又は俗に豆鹿と呼ぶ小さな鹿は、四肢も子供の箸のやうに細く華奢で、四肢を踏張



麒麟

華奢

掌(テノヒラ)

つたまゝ掌に載せることの出来るやうな可愛らしい鹿であります。若しこの鼠鹿に麒麟を見せたら、きつと「麒麟は火の見櫓のやうだ」と云ひかねないであらうと思ひます。

嫩芽(ワカメ)

性質は温順で、草木の嫩芽を常食とします。前肢の長いところへ頸もまた長く、おまけに舌がまた長いと來てゐますから、高い樹木の嫩芽を喰ふに適してゐます。舌が長いので、舌の先で小枝を巻き寄せ、それに開閉自在な唇の働きで、上手に枝葉を巻き取るのです。

「なまけものは、南亞米利加と中央亞米利加とに産する

スロー
動作の緩慢なる
意

名高い動物で、英語でも「スロー」と申しますから、この獸は、どこの國でも「なまけもの」で通つてゐるやうです。

樹上に生活してゐて、

日中は木の枝に四肢でつかまつて、背を下に向け、仰向にぶら下つてゐます。顔を見ても、まだ寝たらないといふやう



なまけもの

相貌

に、間が抜けて、とぼけてゐて、どうしても「なまけもの」と言ひたい相貌を現してゐます。長くて粗末な帯褐灰色の毛で掩はれてゐますが、行動の静かな動物ですから、運動

いしがめ
龜の一種で大き
さ二〇厘位
我が國各地の池
沼に棲む

蝙蝠(カウモリ)

保證



蝙蝠

するたびに、その毛が樹の葉や枝に擦れるといふこともないので、一種の藻が生えて、緑色になつてゐます。水棲動物、特に「いしがめ」の甲に藻が生

えるなどの例はありますが、陸生動物の毛に藻が生えることは、頗る面白い事實なのであります。

「人間は倒さに歩く。」蝙蝠が、かう言つて笑つてゐるかどうかは、保證の限りではありませんが、蝙蝠の休息する時は、少しでも爪の掛る所があると、そこに爪

上野動物園
東京市下谷區上野公園にある

を掛けて身體を倒さに吊り下がります。ある日、上野動物園の參觀客が、蝙蝠の吊り下つてゐる籠の前で、「蝙蝠といふ奴は、年中ぶら下つて平氣でゐるやうだが、あれで苦しくないのかなあ。」と話してゐました。それをある人が聞いて、「人間の方では、そんな思ひやりをして見ても、蝙蝠の方では、人間といふものは、年中倒さになつて歩いてゐるが、氣分が悪くないのかしら。」と言つて笑つてゐるかも知れないよ。」と話したので、參觀者も「成程、それは至極面白い解釋です。」と言つて、破顔大笑したことがあります。（動物談叢に據る）

破顔大笑

柳澤洪園

名は里恭
大和郡山の人
江戸時代の文人
寶曆八年歿
年五十三

二〇 畫家の苦心

柳澤洪園

或人予が許に來りて、「繪に魂を入ると申すことは、いかやうなる事をして描き侍る事ぞ。」と問ふ。予答へていふ、「すべて繪には限らず、何事にも眞心をこめてだに致さば、魂の入らずといふ物あるべからず。」と。他の事はいざ知らず、繪に魂の入りたりと思ふは、泉州界なる一國寺の名畫なり。



一國寺

泉州堺
大阪府堺市
一國寺
臨濟宗東福寺派
の寺
今、布金山大安寺といふ

千利休
千家流茶道の祖
天正十九年歿
年七十一
數寄(スキ)

古法眼元信

狩野元信
足利時代末期の
畫家
寺傳によればこ
の繪は元信の筆
でなく狩野永徳
の作となつてゐ
る

寓居

住持

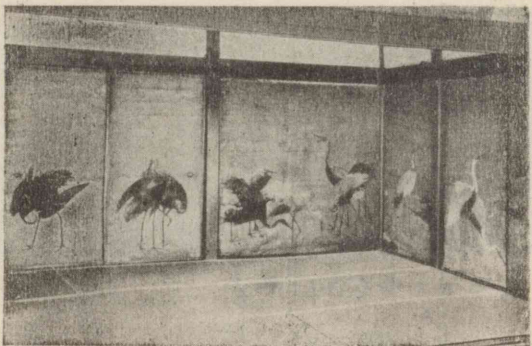
この寺は、千利休も暫く居られし寺にて、庭園數寄を盡くし、座敷も五間ほどあり。その一間には檜一本を描き、一間には臥したる鶴二十五羽ばかりを描きてあり。何れも彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみ、この繪を描ける畫師、この寺に寓居すること三年ばかりの中に、何一つ描きたることなく、碁を好みて只それのみ日毎に樂しみとして、或は此處彼處遊び歩くには、やく三年を経たり。一度だに筆を執りしこともなきは、いかに心得ざるものかなと思ひて、ある時住持の申されけるは、「その許畫をもて一家を成せりといひながら、筆を執りたる事もなく、圍碁にのみ年月を過さるるは

愚老

名殘

恩謝

如何にや。われ衣食の費を厭ふにはあらねど、何處へな



鶴の圖

狩野永徳筆

りとも遊び給へ。愚老も所用ありて京へ上り、事によりては一年も在京せんも測り難し。といふに、かの畫師聞きて、「それこそいと名殘惜しき事に候へ。さあらば年來の恩謝に、何か少しの繪を残し參らすべし。」とて、心構のみにて、又四五日程經るに、住持は何を描くかと思たくて待て

ども、絶えて筆を執らず。

或夜小坊主、住持が居間に夜更けて來り、ひそかに申す

明障(アカリ)
子(シヤウジ)

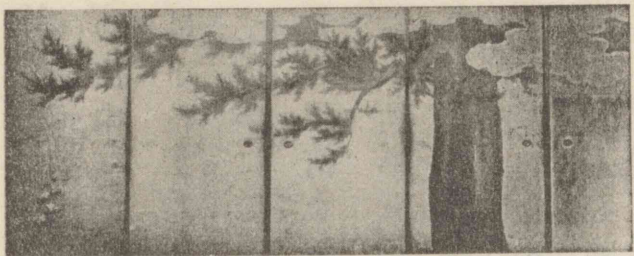
まだき

丹青の妙

やう、「かしこに行き給ひて、そと覗きて、畫師のありさまを見給へ。」と。住持やがて小坊主に誘はれて、畫師が居室を窺ふに、明障子の腰板に身を寄せて、さまざまに姿を變へつつ寢起きする有様を見るより、小坊主を引き寄せ、「來よかし。覗くべからず、早く臥せよ。」とて、その身も寢間に入りたり。明くれば、畫師まだきに起き出で、一間なる障子に描くを見れば、みな臥したる鶴なり。畫勢非凡にして丹青の妙いふべからず。さあるに、またの夜はいかにと窺ふに、前の如く、よもすがら寢ねずして、「明けなばかくや描かん、とやせん、かくやあらまし。」など、獨りつぶやきつつ臥しぬれば、住持も知らぬ顔にて過ししが、十日餘りにし

よべ

杉戸
現在は襖になつてゐる



箱根中山霧隠檜の圖

傳狩野永徳筆

てその鶴二十四五羽を描けり。又も夜更けて覗き見るに、こたびは肘を張り、足を延べ、手を口にあてつつ、鶴の臥したる様してみたり。夜明けて、住持かの畫師が許に來り、「今日描き給ふ鶴の姿は、かやうにや染め給ふらん。」と、よべ覗き見たる姿の様して見せければ、打ち驚き、「禪師には、わが描かんと思ひ構へし心を、早くも悟り給ふは、いかにして知り給へるにか。」と問ふに、「いやとよ、昨夜その許の様子をそと覗き窺ひ知りたり。」といへば、畫師それよりして、二枚は描かずして、杉

下向

雲萍雜誌
柳澤淇國の隨筆

集 四卷
天保十四年刊

戸の板に、檜一樹を描きて出で立ちぬ。この檜を描きし後、東國へ下向のをりから、東海道箱根の山中にて、檜の枝の心に適ひたるがありければ、東國へは下らずして、再び泉州一國寺へ立ち越えしかば、住持見て大いに驚き、「東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしは如何なる事にか」といふに、「前に描きし檜の枝、一枝足らぬ所あり。箱根にてその意を得たれば、わざ／＼立ち戻りたり」とて、一枝をかき添へ、暇乞して出で去りぬとぞ。「畫に魂を入るといへるは、かゝるたぐひと思ひぬ」といへば、或人も感じて歸りぬ。(雲萍雜誌)

小野賢一郎

福岡縣の人
東京中央放送局
文藝部長

懸命

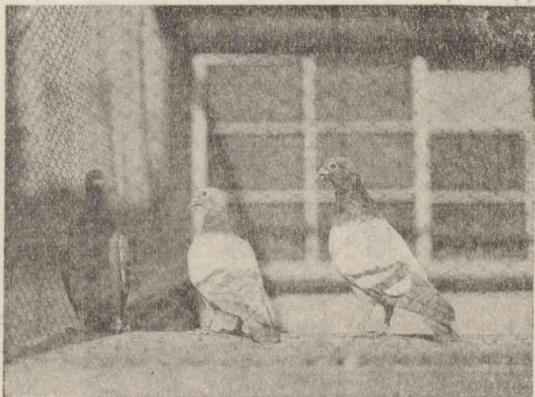
搏(ウ)つ

二 傳書鳩

小野賢一郎

新聞社は、廣く、遠く、深く、正しく、そして早くニュースを得るのに懸命ですが、電信、電話、汽車、自動車、電車、郵便など、ニュースを運搬する機關に對しても、細かい注意と多くの費用とを拂つてゐます。寫眞ニュースは、或場合、記事のニュース以上の大きなニュース價值をもち、讀者の眼や胸を搏ちます。そこで、寫眞を運搬するのにも、種々の機關を用ひて居りますが、遠距離の場合には、早くて正確なのは汽車便による事です。次は飛行機です。これは汽車以上に早い代りに、著

原板



鳩書傳

陸場と、多くの費用とを要します。天候が悪ければ中止しなければならぬ場合もあります。そこで電送寫眞です。電話線を継ぎかへれば、僅か四五分の間に東京・大阪間を送られます。原板より稍、鮮明を缺きますが、大阪から東京へ、東京から大阪へ、五分以内で寫眞が受送されるといふ事は、全く科學の力で、早いも早い、こんな早い輸送方法はありません。併し、機械のある場所と場所との間に限られるので、機械のない所では、送

生彩

勝手

勞銀

る事も受ける事も出来ません。是に於て、我が傳書鳩に生彩があります。傳書鳩は、自由な場所から送る事が出来ます。但し速力に於て、電送寫眞機や飛行機には及びませんが、急行列車よりは早いのです。天候が險惡な時には鳩も困りますし、また未知の世界を飛ぶ事も困難ですが、大體勝手の分つた土地からなら、勇敢に、不平も言はず、途中で水も飲まず、一氣に寫眞を背負つて飛びます。そしてどうでせう、一箇月の食糧三十錢、一日一錢あれば飲食に満足してくれるのです。これ程忠實な、そして勞銀の安い空中の勞働者、空中の通信者は外にありません。

有史以前

外國では、有史以前から空中通信に傳書鳩が利用され
たらしく、その原産地はエジプト・イタリアなどのやうで



(一) 鳩書傳の舎鳩動移

すが、今日の傳書鳩の基礎的
種類を作つたのは、ベルギー
人です。そしてフランスで
改良され、今日の色々な種類
が出来たわけです。
日本では、徳川時代に商人
が土鳩を使つた事があると
聞いておますが、明治三十二年頃、支那から支那種の傳書
鳩を三百羽輸入し、同三十四年ベルギーから三百羽輸入

マルコニー
イタリーの科學
者・發明家

皮肉

歐洲大戦争

西曆一九一四年
より同一九一八
年まで續いた

世界大戦ともい
ふ

ベルダン要塞

フランスの東北
部にある要塞

歐洲大戦當時の
激戦地

砲煙彈雨

した事があります。同三十五年には、ドイツから五十羽
輸入したのを、日露戦争の時、臺灣の澎湖島で使ひました
が、うまくゆかなかつたさうです。そこへもつて來て明
治四十二年、マルコニーの無線電信が發明されたもので
すから、非科學的通信法は全滅してしまひました。

所が何といふ皮肉でせう、凡ゆる科學の力を活用して
戦つた歐洲大戦争で、科學的通信機關が使用不可能に陥
つた時、神の使の如く活動したのは實にこの鳩でした。

鳩は毒瓦斯の中を潜りぬけて活動しました。目を爛
らしても活動しました。ベルダンの要塞にゐた一羽の
鳩は、援軍を求める通信を齎らして、砲煙彈雨の間を飛び

絶大

招聘

ました。そしてこの大使命を果しましてからは、「非科學的通信法」もまた絶大な力をもつ事を認められ、大正八年日本陸軍でもフランスから鳩を輸入し、將校一名、下士二名を招聘して、訓練を開始したのであります。

かくして今日では、新聞のニュース、またはニュース寫眞を運搬する上に於ても、鳩は重大な役目をもたされ、毎日活動してゐます。

明治神宮外苑
東京市四谷・赤坂
坂兩區に跨る
頻々

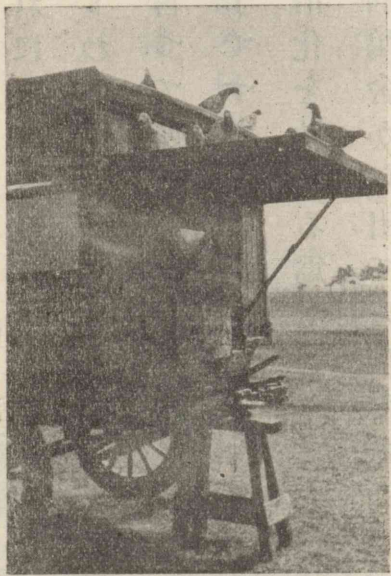
明治神宮外苑を始め、東京近郊の野球場やテニスコート、陸上競技場から、頻々と鳩の放たれるのを見られるのでせう。あれが傳書鳩で、二三分から五分の間に、新聞社の屋上の鳩舎に歸ります。鳩係が脚につけてあるアルミ

通信筒

早慶戦
早稻田大學對慶應大學野球戦

翻譯

ニュームの通信筒から原稿を取り出して、ベルを押しします。すると編輯室でベルが鳴り、屋上から針金傳ひに原稿が届きます。原稿は薄い紙に書いてありますが、新聞一段の行數を、鳩三四羽で運ぶのはわけもない事です。「もしも、もしも、早慶戦第一回の裏、もしも」などと電話でやつてゐる間に、鳩ならもう原稿を持つて來ます。電話ですと、一度速記に取り、それを日本字に翻譯するのですが、鳩のはすぐ工場へ出



(二) 鳩書傳の舎鳩動移

される日本字の原稿ですから、早くて便利です。傳書鳩の食費は、一日一錢だと申しましたが、どんな物を食べてゐるかと言ふと、たうもろこし、白豌豆、これが常食で、玄米、菜種が少量、それに水を飲むばかりですから、一箇月三十錢の食費でいゝわけです。いや、この外に妙な物を食べます。鹽土と言つて、煉瓦の粉末や、赤土や、鹽などを石膏で固めたお團子です。これをこつ／＼啄いてゐます。嘴を強くし且消化を助ける爲ださうです。運動としては、一日三回鳩舎から出て、天空を舞ふだけです。どうかすると、糞を落すかも知れませんが、頭や服を汚さない限り、大目に見てやつて下さい。

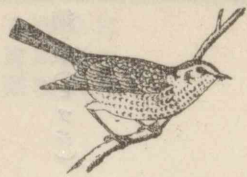
石膏(セツカウ)

三 春來る詩

三 木 露 風

三木露風
名は操
兵庫縣の人
詩人

鶉(ツグミ)
燕雀類の鳥で形
は百舌よりも大
きい



雪の中に春はきたりて
鶉など啼く
松の葉にまじれる檜の枯葉
林にさら／＼と鳴るは
さびしけれど
水の小流れの
やう／＼雪とけて
かすかに音立ててゆくに
歡びあり。



緬羊(ヒツジ)

丘の路、林の路、野の路
 いたるところに通ふ、
 緬羊五つ六つ
 柔かき茶色の毛を垂れて
 ころ／＼と出でてあそべり。

二月、三月

廣き野と空とに
 大いなる春を感じず。

(現代詩人全集)



大久保弘一
 陸軍歩兵少佐
 陸軍省新聞班員

役割
責務

複雑多岐

武力戦
 経済戦
 政略戦
 思想戦

三三 銃後のつとめ

大久保弘一

現代戦に於ける女子の役割と責務とは、歐洲大戦に於けるよりも、更に複雑多岐にして、且重大性を加へてきたものと考へなければならぬ。
 それは科學の進歩、殊に航空機の著しい發達に伴ひ、戦争の形式が愈々複雑を極め、困難を加へるやうになつたことと、戦争は單に武力戦に止まらず、經濟戦・政略戦・思想戦等範圍が擴大せられ、平時・戦時の區別すら殆ど分ち難い状態となつたからである。
 戦争にあたり、女子の最大の責務は、何よりも先づ家庭

銃後
端的

の人として、堅實なる思想と意志とを持つて、如何なる困苦にも堪へ、男子と同様の覺悟を以て、最後まで戦勝の一途に邁進することである。銃後の堅忍と後援とは、實に



ニールツム

この意志と熱誠の最も端的なる表現であり、これが一般女性に課せられた最大の役割であると悟らねばならない。

嘗つて伊國首相ムツソリニは、我が爆彈三勇士に對しては、日本兵として當然の行爲なりとして、餘り感心もしなかつたといふが、その後大阪に於て井上中尉夫人が

饒別
白装束
祈禱

夫の出征にあたり、死を以て激勵したことを聞いて深く感動した。又日本の一兵士の老母が、息子の出征にあたり、饒別に白装束を作つて神前に供へ、神官の祈禱を受けて後、息子に渡し、「これ俸、わしはお前に無事で歸つて貰はうとは思はない。どうかこの白装束を着て御國の爲、立派な働きをして死んでおくれ。わしはお前のお骨の着くのを待つておます。」と懇に言ひきかせたと言ふ話を聞いて、感動のあまりさめどと泣いたといふことである。しかも彼は單にこれを悲壯なる實話として聞いたのみではない。「日本兵の強いのは、實にその家庭にある母たり妻たる者がかく強ければこそである。」と感じたからで、

着眼

早速この着眼の下に自國の家庭婦人の實情を調査せしめたとの事である。

古來日本は「水兵の母」を生み、「一太郎やーい」の母を出し、これが戦時に於ける母なるものの鑑であるとされてゐる。

滿洲事變に於ても、幾多の雄々しい母や、健氣な妻が現れて、悲壯なる物語を残してゐる。日頃優しい母が「死んで歸れ」と勵まし、氣弱な妻が「家の事は心配しないで下さい」と立派な覺悟を



滿洲に於ける日軍

滿洲事變
昭和六年九月に
勃發
健氣(ケナゲ)

私情

示すところに、凡ての男性は微笑んで死んで行くことが出来る。

無事で生きて歸れかしと願ふのは人情である。併し御國の爲には私情を忘れ、可愛い子供に死んで御奉公せよと云ひ得るところに、日本女性の偉大さがある。かくてこそ爆彈三勇士が生まれるのである。

滿洲事變の當初、出征將兵に送るべき婦人の慰問激勵文は連日机上に山をなした。その中、幼い小學女生徒から「お



慰問品發送

恤兵

父さまやお母さまに戴いたお小遣を御送りします。おいしいものを買つてたべて下さい。そして戦争には屹度勝つて下さい。」といふ意味のことを認めて金一圓を封入して送つて来たことがあつたが、それには全軍の將兵が泣かされた。其他幾多女性の赤誠を籠めた慰問恤兵品は、戦場の將兵をどんなに慰め勵ましてくれたかわからない。

銃後の後援には、女性の力程尊いものはない。戦地で働く兵士の魂は、優しい女性の力によつて、最大の感激と刺戟を受け、以てあらゆる困苦と缺乏とに堪へ、又甘んじて死んでゆくことも出来るのである。

二葉亭四迷

本名長谷川辰之助
東京市の人
文學者
明治四十二年歿
年四十八

二四 ポチ

二葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、思ひ出すのは親のこと……
それにポチのことだ。

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の、春雨のしとしとと降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り、宵の口から寝てしまつたが、ふと目を覺すと、遠くで微かにきやん／＼といふやうな聲がする。不思議に思つて、耳を澄してゐると、次第に大きく高くなつて、終には確に門前に聞える。かうなつてみると、疑もなく小犬の啼き

聲尻
めいる

欠(アクビ)

いたいけ

聲だ。時々喉でも締められるやうに、けたましくきやんきやんと啼きたてる。その聲尻が、やがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠いく、所へ消えてゆくかと思へば、忽ちまた近くで堪へきれぬやうに啼きだして、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、就中犬は大好きだから、近所の犬は大抵なじみだ。けれども、こんなかよわい、いたいけな聲で啼くのは一匹もないはずだから、不思議に思つて、つと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」



二葉亭自像

と母が寢返りをうつてこちらを向いた。私はこの返答はさしおいて、

「あれは白ちやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つてなあに。」

「棄犬つて……誰かが棄てて行つたのさ。」

「どうして棄てて行つたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。どこまでも相手

になつて、その意味を説明してくれて、もうおそいから黙つてお寝。と優しくいつて、またあちらを向いてしまつた。私もまた夜着を被つた。犬は門前を去つたのか、啼き聲が稍遠くなつた。寝られぬ儘に、私は夜着の中で、今聞いた母の説明を繰り返しく、味はつてみた。まづどこかの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。小さなむくむくしたのが重なりあつて、首をもたげて、みいくと乳房を探してゐるところへ、親犬がよそから歸つて来て、その側へどさつと横になり、片端から抱へこんで、べろべろなめると、小さいから舌の先でたわいもなくころころところがされる。ころがされては大騒ぎして起き返り、また

たわい

産毛(ウブゲ)

よちよちとはひ寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探りまはり、漸く柔かな乳首を探り當て、あわててちうと吸ひついて、小さな両手でもみたてもみたて吸ひ出すと、甘い温かな乳がどくどくと出て来て、喉へ流れこみ、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割りこんで来る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騒ぎやつてみるが、とうとう取られてしまひ、又そこらを



小 犬

夢心地

尋ねて、他の乳首に吸ひつく。そのうちに、お腹も一ぱいになり、親の肌で體も温まつて、とろけさうない心持になり、つい、うとくとなる、含んだ乳首がぬけさうになる。夢心地にもあわててまた吸ひついて、一しきり吸ひたてるが、ちきにまた、たわいなくうとくととなつて、乳首が終に口をぬける。ぬけても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

その時、忽ち暗闇からもじやくと毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐるところを、むずとひつつかみ、宙に吊す。驚いて目をぼつちりあけ、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて

窮屈

足搔(アガキ)

もがくうちに、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいてゐるうちに、ふと足搔が自由になると、襟もとをつかまれて、高いと所からどさりと落された。うろろとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な所で、誰もゐない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間にぬれしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身ぶるひ一つして、くんくと親を呼んでみるが、どこからも出て來ない。途方に暮れてよちくとはい出し、雨の夜中をたゞひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る聲が、さつき一度門前へ來て、またどこへかさまよつ

途方

て行つたやうだつた。それがいつかまた戻つて来て、どこをどう潜りこんだのか、今は啼き聲がまさしく玄關先に聞える。

二

「お母さんく、門の中へはいつて来たやうだよ。」

と私が何だかゝた、まらないやうな氣になつて、また母にいひかけると、母は氣のなささうな聲で、

「さうだね。」

「出てみようか。」

「出てみないでもいいよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ——あら、あんなに啼いてゐる……。」

るた、まらない

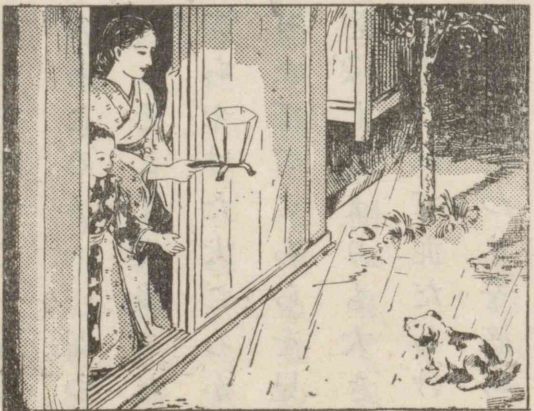
折から絶え入るやうに啼く聲に、私は我知らずむつくり起き上つたが、何だか一人では、こはいやうな氣がして、
「よう、お母さん、行つてみよう。」
「ほんとにしやうがない子だねえ。」

澁々

雪洞(ボンボリ)

沓脱(クツヌギ)

と小言をいひく、母も澁々起きて雪洞をつけて立ち上つたから私もその後について玄關へ出た。母が沓脱へ降りて、格子戸の掛金をはづし、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらくちらくと靡く。



その時、小さな毬のやうな物が、つと軒下を飛びのいたやうだつた。やがて雪洞の火先が立ちなほつて、一道の光がさつと戸外の暗黒を破り、雨水のところ／＼に溜つた地面を一すぢ細長く照らし出した。そこに、生後まだ一箇月も経たぬ、むくむくと肥つた赤ちやけた犬ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに振りたてて、こちらを見上げてゐる。なりは私が寝てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身は雨にぬれしよぼたれて、泥だらけだ。だらりと垂れた、割合に大きい耳からしづくを滴らし、ほつちりと二つの眼を青貝のやうにならべて光らせてゐる。

「おやく、まあかはいらしい……」と母もつい言つてしまつた。況や私は犬好きだ。じつとして見てはゐられない。母の袖の下から首を出して、ちよつ／＼と呼んでみた。

と、さほど恐れた様子もなく、ちよこ／＼と側へ来て、さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐい／＼押し上げるやうにして、べろ／＼となめ廻した。手をくれるつもりなのか、しきりに圓い前足を舉げて、ばたく／＼やつてゐたが、はては、やんはり痛まぬほどに小指をかむ。

私はかはいくて／＼たまらない。母の顔を見上げな

がら、少し鼻聲を出しかけて、
「お母さん、何かやつて。」

「やるもいゝけど、居ついてしまふと仕方がないねえ。」
と、口では拒むやうなことをいひながら、それでも臺所へ
行つて、缺茶碗に冷飯を盛り、何かの汁を掛けて来てくれ
た。早速沓脱へ引き入れてこれをあてがふと、小犬はち
よつと香を嗅いで、すぐうまさうに、まづびちやくとな
めだした。汁が鼻孔に入ると見えて、時々くしんくしんと
小さなくしやみをする。忽ち汁をなめ盡くして、今度は
飯にかゝつた。他に争ふ兄弟もないのに、頻りに小言を
いひながら、がつくと食べだしたが、飯はまだ食ひ慣れ

上
頤

澁
る

棧俵(サンダラ)
法師(ボウシ)
米俵の兩端にあ
る圓く平たい藁
の蓋

ぬかして、とかく上頤に引つつく。首を振つてみるが、そ
んなことではなか／＼取れない。はては前足で口の端
を引搔くやうな眞似をして、大もがきにもがく。
この隙に私は母と談判を始めて、「今晚一晚泊めてやつ
て。」と雪洞を持つた手にぶらさがる。母はちよつと澁つ
たが、もうかうなつては仕方がない。「お父さんに叱られ
るけれど。」といひながら、棧俵法師を捜して来て、沓脱の隅
に敷いてやつた。それはよかつたが、その晩一晚啼き通
されて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小
言をいはれたさうな。平凡

北原白秋
名は隆吉
福岡縣の人
詩人
潮曇

二五 三月の言葉

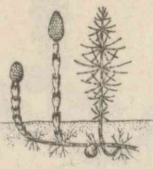
北原 白秋

けふは明るく曇つてゐる。潮曇とでもいはうか、極めて淡い紫の、しかも底に何か光つた明るさを保つてゐる。暖かくなつたものだと思ふ。
梅の花はもう盛りを過ぎてしまつた。梅といへば、この春は殆どその盛りの頃を私は東京で暮した。歸つて見ると、もうそこらこころでは早くも散りかけてゐた。ちらほらと赤い萼が目につくやうになると、梅も見づらいものになる。惜しい季節を私は外で過してしまつた。それから私は、徹夜つゞきで私の仕事にいそしんだ。

蔦の蔓(タウ)
早春葉に先立つて地下から出る花莖をいふ



土筆(ツクシ)
すぎなの地下莖から生ずる子葉群の莖



孟宗(マウソウ)
竹の一種孟宗竹
高さ一三―四米に達する

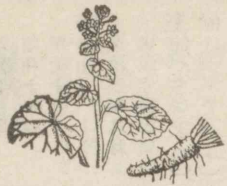
東京からの引き續きで、かれこれ二十日餘りもこの徹夜をぶつ通してゐる。それで、殆どこの窓から眺める季節しか、私のものではなかつたやうな氣がする。
それでも、ひま／＼には、ちよい／＼蔦の蔓を見つけた。摘んでおつゆに入れさしたり、焼いたりした。裏隣の別荘の山へ行つては、子供と一緒に土筆を摘んで遊んだ。またそれを両親や親しい友人たちに送つたりした。
前とうしろの孟宗藪は、もう大分黄ばみかけて來た。それでも、まだどうやら淡い緑を光らしてゐる。竹の秋にはまだ／＼時日がある。
家の前の枇杷の木は、まだうら枯れの寒い枝ぶりを見

せてゐる。いやもう、木そのものが枯れて来たのである。たゞ一つ二つの枝に、青い、それでも枇杷の葉らしい葉を二三枚づつ垂れさげてゐる。花もとう／＼咲かずじまひであつた。

桃山時代
安土桃山時代と
もいふ
豊臣秀吉の時代
古雅

廢墟

椿は寺のはいり口に咲きだしたやうである。そこには桃山時代からの古雅な茅葺の山門があつたが、地震でつぶれて、取拂はれてしまつた。たゞ紅い椿だけは、今年も落ちかさむことであらう。この頃、庭では妻たちが毎日土をならして、花壇の下地をこしらへてゐる。種子もいろ／＼取寄せたらしい。廢墟のやうなこの壞屋の庭にも、この夏は又明るい香氣



山葵(ワサビ)
十字科の植物
根莖は味辛く香
氣が高い

が燃え立つてあらう。下でほじくり返してゐる土のかをりを嗅いでゐると、全く春はい／＼なと思ふ。土のかをりはい／＼ものである。殊に少し濕つた朝などの、早春の土のかをりといふものは、稍冷たく寂しくてよい。浅い緑の山葵の香のやうな氣品を持つてゐる。それはまた生まれたばかりの幼い蝶の翅などの、すぐに染み易いかをりをである。さうしたかをりをつけた蝶などが、よく歩いてゐる人の面などを掠めて飛んで行くものである。しかし、この春はまださうした胡蝶に出會はない。向ふの山も、この頃よく霞んで見える。炭焼の煙までが、殊に濃く白く深まつて来たやうな氣がする。

坪内逍遙

名は雄藏
愛知縣の人
文學博士
昭和十年歿
年七十七
春の初
文治三年二月

先達(センダツ)

安宅

石川縣能美郡安宅
關址は海中に没したといふ

三六 安宅

坪内 逍遙

時しも頃は春の初、風まだ寒き北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の疑を受け、奥州さして落ちて行く。主從僅に十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身を窶し、日數程經て加賀國安宅の港に着きにけり。
義「いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設けて、山伏を嚴しく取調ぶる由、いかにすべきぞ。」
辨「これはゆゝしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」
人々「いや、何程のことかあらん、たゞ打破つて御通り

あるべし。」

辨「いや、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、なるべく穩かなる手段を取りたし。」



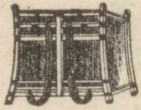
逍遙 肖像

義「然らば辨慶、ともかくも其方の工夫に任せん。宜しく計らひくれよ。」

山伏に身を窶せども、包みがたきは我が君の御品格なり。畏れながら、暫く強力に御身を窶され、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあ

強力(ガウリキ)

山伏や行脚僧などが背中に負ふもの。中に佛具や食器を入れる



富樫左衛門
名は家直

東大寺
華嚴宗の大本山
聖武天皇の建立
勸進

れかし。さなくば忽ちに見出され候はん。」
 義「げにく、これは尤ものことなり。」
 姿を窺し、主従はやうやく關に近づきて通らんとすれ
 ば、關の役人富樫左衛門、
 富「やあ、山伏、關なるぞ、名をなのれ。」
 とぞ呼ばはりける。
 辨「承つて候。これは奈良東大寺建立のために、北陸道を
 勸進する山伏にて候。」
 富「それは殊勝のことなれども、山伏なるからは、この關は
 通しがたし。」
 辨「して、そのいはれは。」

ならめ

聽聞
(モチャウ)

富「さればなり。頼朝・義經御不和により、義經殿には山伏
 に姿を變へて、奥州へ落ちさせらるる由。ゆゑに諸國
 に新關を設けて、山伏を堅く留むるなり。一人も通し
 がたし。」
 辨「承つて候。しかし、賈山伏をこそ留めらるるならめ、ま
 ことの山伏を留め給ふいはれは候はじ。」
 富「あらむづかし、論よりは證據なり。まこと東大寺建立
 の勸進ならば、勸進帳のあるべきはずぞ。ここにてそ
 れを讀み上げられよ。某これにて聽聞せん。」
 辨「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。」
 もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中より有り合せの

即智

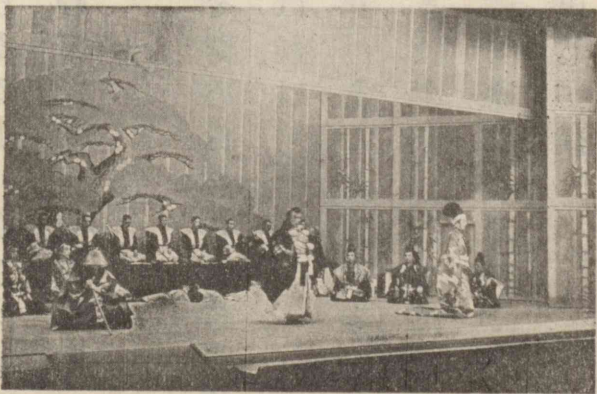
卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつつ、即智を以て文を綴り、まことしやかに聲高々と、天も響けと読み上げたり。富樫つづく聞きすまし、

富「最早疑は晴れて候。御通り候へ。」

辨「忝く候。」

けにや紅は園生に植ゑても紛れなし。後に従ふ強力を、富樫目早く見咎めて、

富「いや、暫く。その強力は通しがたし。とゞまれ。」



(劇)

帳進勸

紅
菊科の植物
夏、紅黄色の頭
状花をつける

のゝしる
一期の浮沈

と、のゝしりぬ。すは我が君を怪しむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立留る。

辨慶騒がずそらとぼけ、

辨「やい、強力め、何とて早く通らぬぞ。」

富「いや、それはこなたより留めたるなり。」

辨「そはまた何故。」

富「あの強力が姿、義経殿に似たるゆゑなり。」

辨「奇怪千萬、義経殿に似たりとや。しか言はるる強力めは一生の名譽ならんが、さりとては腹立たしや。今日のうちに能登境まで行かんと思へばこそ、強力雇ひたるに、僅の笈を重ねに負ひて、人々に後るればこそ、貴人

金剛杖
山伏等の持つ杖
白木で八角にな
つてゐる



打擲(チャウ)
疑念(チャク)

かとも怪しまるれ。憎さも憎し。いで、懲らしてくれ
ん。
金剛杖をおつとつて、さんぐに打擲す。これはと驚
く人々を、辨慶目にて制し止め、なほも激しく打据うる。
富樫やうやく疑念を解き、
富「これは我等が誤なり。その強力には構ひなし。疾く
疾く一同御通りあれ。」
いふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばくと
立ち上り、關路を後にしづくと、奥州さして下りけり。

二七 裸の王様

楠山正雄

楠山正雄
東京市の人
文學者

もう幾年か前、ある國に新調の召物を着ることが、何よ
りもお好きな王様があつて、ありつたけのお金をかけて、
何でも立派に見られたいとばかり願つてみました。こ
の王様は、兵隊も可愛がらなければ、遊びにもお出かけに
なりません。たまに公園へ馬車を走らせるといつても、
それは變つた召物を人民達に見せる爲でした。
王様のおいでになる大きな都は、いつも大へんな賑は
ひで、毎月澤山の外國人がよそからやつて來ました。あ
る時、その中に交つて二人の詐欺師がやつて來ました。

詐欺師

機織(ハタオリ)

二人は、自分達は機織だが、それはく立派な織物を織ることが出来ると言ひ觸らしました。その着物の色合なり模様なりが見事なばかりでなく、その織物で作つた着物には不思議な性質があつて、何でも自分の身分に相應しない役にゐるものとか、どうにもならないやくざものには、その着物は目には見えないといふのでした。

王様はこれを聞いて、「なるほどそれは調法な着物だな。わたしがそれを着れば、この國で誰が身分に相應しない人物であるか見つけ出すことも出来るし、利口と馬鹿の見分けもつく譯だ。よし、早速その織物を織らせることにしよう。」かう思ふと王様は二人の詐欺師に澤山の前

調法

調法
澤山の前

金をやつて、早速仕事を始めるやうに言ひつけました。

さて二人の詐欺師は機を二臺据ゑつけて、機を織る真似をしました。早速一番上等な絹と、一番値段の高い金糸を註文しましたが、これは自分等の懐にしまひ込んで、相變らずからつぽの機に向つて、夜おそくまでとんからり、とんからり、やつてゐました。

「さて、どの位織れたか、見たいものだ。」と王様は思ひましたが、やくざな人間とか、自分の身分に相應しないものには見えないといふので、少し氣味が悪くなりました。何も自分は、そんなことをこはがる必要はないと思ひこんでゐましたが、まづ誰かほかの者をやつて、どんな風だか

手ぐすね

勿體らしい

分別

様子を見させることにしました。何しろ都中の人は、今ではみんな、この織物がどういふ不思議な力をもつてゐるかといふことを知つてゐました。それでお互に手ぐすねひいて、一體仲間の誰が馬鹿なやくざな人間だか見てやりたいと、待ちあぐんでゐる所でした。

「よし、機織の所へはあの勿體らしい老大臣を見せにやらう。あれなら分別もあり、職務に忠實なことは第一等の譯だから、きつとよく見届けてくるにちがひない。」と王様は思ひました。

さて忠義な老大臣は、二人の詐欺師がからつほの機を織つてゐる廣間へやつて來ました。

「やれやれ大へん。」と大臣は思ひました。そして兩方の目を出來るだけ大きくあげました。「わたしにはまるで何も見えない。」けれども大臣はそれを口に出しては言ひませんでした。

でも大臣はかう思ひました。「やれやれ、おれはそんなにばかなのかなあ。おれはさうは思はなかつた。誰にもそれがわかる筈はあるまい。おれは大臣の職に相應しない人間なのかな。いや、おれには織物が見えなかつたなどと人に言つてはなるまいぞ。」

「さて何かおつしやつては頂けませんか。」と詐欺師の一人が言ひました。

「ああ、いや、見事なものだ。實にすばらしいものだ。」と大臣は、目がねごしにのぞいて見て言ひました。

「いや、模様といひ、色合といひ恐れ入つたものだ。――宜しい、王様にはわしが非常に満足したことを申し上げよう。」

「さうですか、それは有難うございます。」

と二人の機織が言つて、それからまた色の名の説明をしたり、めづらしい模様の話をしたりしました。大臣は熱心に耳を傾けました。よく聞いておいて、王様の許に歸つて、それを鸚鵡返しにくり返すつもりでした。そしてその通りにやりました。

鸚鵡返し

都の人は寄ると觸るとその大層もない織物の話をしあひました。

そのうち王様は、織物がまだ機に乗つてゐるうち、一度自分の目で見たいと思ひました。そこで選り抜きの家來を大勢引きつれて、その中には前に觀に行つたことのある二人の正直な家來も交へて、狡猾な詐欺師が經絲も緯絲もなしに、せつせと機を織つてゐるところへぞろぞろと出かけました。

「はて、これはどうしたものだ。おれにはまるで何も見えない。ひどいことだ。おれは馬鹿なのかしら。おれは王様には相應しない人間なのかしら。これこそ一生

狡猾
經絲(タテイト)
緯絲(ヨコイト)

の大事件だ。——王様は心の中ではかう思ひながらも、わざと大きな聲で、

「おお、なか／＼見事だ。ほめてつかはずぞ。」

かう言つて、さも満足らしくうなづいて、空つぽな機を眺めました。何も見えないとは言へなかつたからです。お供に連れて来た家來達も一緒になつて、さん／＼穴のあくほど眺めました。やはり何も見えませんでした。

併し王様と同じやうに、

「はい、なか／＼見事で。」

と言ひました。そしてこのすばらしい新調の召物を近く行はれる筈の大式典の行列の折、お召しはじめになる

やうに勧めました。

「目がさめるやうだ。見事なものだ。大したものだ。」とみんな口から口へ言ひ合ひました。感嘆の聲が湧くやうに起りました。王様は二人の詐欺師にめい／＼勳章をさげさせ、改めて「王室機織師」の稱號を授けました。

いよ／＼行列があるといふその前の晩、一晚かかつて、詐欺師は仕事をしあげました。その晩は、十六本以上の蠟燭がかん／＼ついておりました。誰にも王様の新調の召物をしあげるために、徹夜のはたらきをしてゐると思はれました。詐欺師は機から織物をおろすやうな風をして、それから大きな鋏で空のきれを切る眞似をしまし

外套

た。そして絲もない針でちく／＼やつて、とう／＼「さあ
 お召物が出来上りました。」と言ひました。
 王様は一等身分の高い貴族達をつれて、御自身お出ま
 しになりました。すると二人の詐欺師は、何かひつばつ
 てでもゐるやうに、片手をあげて、
 「さあ御覽遊ばしませ。これがおズボンでございます。
 これがお上着でございます。これがお外套でござい
 ます。それからこれがあれ、これがそれでございます。
 もう蜘蛛クモの絲のやうに軽く、何も召してゐないやう
 にお思ひでございませう。が、これこそ、この織物のす
 ぐれたところなのでございます。」

姿見

「さやう、さやう。」
 と貴族たちは残らず口を揃へて言ひました。その癖何
 も見えはしませんでした。それもその筈、何もないので
 したから。
 「王様にはお召物をおぬぎあそばしますか。さういた
 したら、あの大姿見の前で新調のお召物をお着せ
 申すでございませう。」
 と詐欺師は言ひました。
 王様は服をぬぎました。すると詐欺師は、新調の服を
 一つ一つ着せるやうなふりをして、腰のまはりにとりつ
 いて、何かそこをしめるやうな恰好をしました。これは

マントをつけるまねでした。王様は姿見の前でからだを前後にひねくりました。

「おお、まことによくお似合ひ遊ばします。どうもお見事なことでございます。模様といひ、色あひといひ、恐れ入つたお召物でございますな。」

こんなことを皆は言ひました。

「王様のお行列にさゝげてまゐる筈の天蓋ガイを用意いたして、あちらに控へてをります。」

とお附の家來が言ひました。

「よし、支度はいゝぞ。」

と王様も答へました。

天蓋

「どうだ、よく似合つたであらうが。」

かう言つて、またも王様は姿見に向ひました。何でも、自分の衣裳に見とれてゐる風をしなければならぬと思つたからです。

マントの裾を捧げる役の家來たちは、床に手をふれるほどに腰をかゞめました。それは、さもマントの端を手にもつてゐるやうに見えました。それからそのまゝ、何かを空に捧げるやうな形をして立ち上りました。何も見えないといふことを、人に氣づかれまいとばかりしてゐるのでした。

そこで王様は立派な天蓋の下に入つて、行列をつくつ

てねり出しました。往來や窓際に立つて拜觀する者も、
「どう、王様の新調の召物は見事なものだね。あのマン
トの裾の立派さはどうだ。實によくお似合になるで
はないか。」

と言ひ合ひました。誰も自分だけ見えないと思はれた
くありませんでした。なぜならそれは、自分が自分に相
應しない人間であるか、またはひどいやくざ者だといふ
ことを白狀することになるからです。この王様の召物
で、これだけの評判をとつたものはありませんでした。
「でもあの人なんにも着てゐないや。」
とふと一人の子供が叫びました。

白狀

囁く

「いやはや、聞いたか、子供といふものは罪の無いことを
いふものだ。」

とその父親が言ひました。やがて子供の言つたことが
それからそれと囁かれました。

「あの人何も着てゐないのだ。子供はさう言つてゐるぜ、
何も着てゐないと言つてゐるぜ。」

「でもほんたうに何も着てゐないのだからなあ。」

と、とう／＼残らずの人が言ひました。すると王様は自
分にもみんなの言ふことが本當らしく思はれるので、こ
の言葉が胸にずきんと來ました。でも、

「いや、おれはどこまでも堂々と行列を續けなければな

國語假名遣一覽

(i) イ

ひ・ゐ・い		語の頭では次にあげた以外の語にはいを用ひる。	
あゐ(藍) あぢさゐ(紫陽花) いぬゐ(乾)(戌亥) うなゐ(鬢髪) かもゐ(鴨居) かたゐ(乞食) くもゐ(雲居) くらゐ(位)(座居) くわゐ(慈姑) くれゐ(紅) しきゐ(蘭)(敷居) しばゐ(芝居) せゐ(所爲) とのゐ(宿直)(殿居) とりゐ(鳥居) なるゐ(地震) ひきゐ(率)(引居) ふとゐ(莞) まとゐ(團欒)(圍居) まゐる(參)(目居) まとゐ(基)(本居) もちゐる(用)(持以)	あゐ(藍) おい(老) むくい(報) しいじ(四時) しいか(詩歌) しいか(詩歌)	あさい(朝寝) おい(老) むくい(報) しいじ(四時) しいか(詩歌) しいか(詩歌)	ついち(築地) つきち ひいき(最良)(引氣) ひきき やいば(刃)(焼刃) やきば さいて(咲きて) 才行四段活用 かいて(書きて) の連用形 さいて(解きて)
いしすゑ(礎)(石据) うゑる(飢)(餓)	かゝる(度)(金の兄) きゑる(消)	次の如く音便にてきしがいとなるもの かい(權)(搔) かき かうがい(筭)(髮搔) かみかき きさい(后) きさき さいたま(幸) さきたま さいはひ(幸) さきはひ たいまつ(松明) 焚松たきまつ ついたり(朔)(月立) つきたち ついたり(衝立) つきたて ついで(序)(次手) つぎて	1. 語の頭にあつて「い」と發音する時、ひを用ひることは全くない。 2. 語の間・語の末に於ては、ひを用ひることが最も多い。
語の頭では次にあげた以外の語にはえを用ひる	語の間・語の末では次にあげた以外の語にはへを用ひる。	1. 語の頭にあつて「え」と發音する時、へを用ひることは全くない。 2. 語の間・語の末に於ては、へを用ひることが最も多い。 3. や行活用の動詞の語尾はこの外に於てもすべてえ。	

(e) エ

へ・ゑ・え		語の頭では次にあげた以外の語にはおを用ひる。	
ゑがく(畫) ゑがほ(笑顏) ゑくぼ(鬢) ゑぐる(剝) ゑさ(餌) ゑさし(餌差) ゑづく(嘔吐) ゑつぼ(笑壺) ゑどる(彩) ゑのぐ(繪具) ゑぶ(醉) ゑぼし(烏帽子) ゑま(繪馬) ゑむ(笑) ゑる(彫)(鏤) ゑんじゆ(槐)	うゑる(植) うゑき(植木) うゑこみ(植込) こゑ(聲) こすゑ(梢)(木末) すゑ(木) すゑる(据) すゑもの(陶器)(据物) つゑ(杖) ともゑ(巴) ゆゑ(故) ゆゑん(所以) あまゑる(甘) いゑる(癒) いぼゑる(嘶) いりゑ(入江) おぼゑる(覺) おぼゑる(覺)	あゑ(青) あまがひ(螺鈿)(青貝) あま(魚) いさゑ(功) うゑ(魚) かつゑ(鯉) かはゑ(鱒) かまる(薫) くちゑし(口惜)	あふぐ(仰) あふぐ(煽) あふぎ(扇) あふひ(葵) あふち(棟・樗) あふみ(近江) あふる(煽) かげろふ(陽炎) きのふ(昨日)
を(男・雄・夫・壯)(小)	をす(牡)	あゑ(青)	あふぐ(仰)
を(尾)	をす(小簾)	あまがひ(螺鈿)(青貝)	あふぐ(煽)
を(麻・苧)	をす(食)	あま(魚)	あふぎ(扇)
を(峯・岩)	をす(獵)	いさゑ(功)	あふひ(葵)
を(唯)(返事の聲)	をだま(李環)	うゑ(魚)	あふち(棟・樗)
を(し)(雄々し)	をち(遠)	かつゑ(鯉)	あふみ(近江)
をか(岡・丘・陸)	をち(伯叔父)(小父)	かはゑ(鱒)	あふる(煽)
をか(可笑)	をつと(夫)(男人)	かまる(薫)	かげろふ(陽炎)
をかし(可笑)		くちゑし(口惜)	きのふ(昨日)
語の間・語の末では次にあげた以外の語にはおを用ひる。	語の間・語の末では次にあげた以外の語にはへを用ひる。	1. 語の頭にあつて「え」と發音する時、へを用ひることは全くない。 2. 語の間・語の末に於ては、へを用ひることが最も多い。 3. や行活用の動詞の語尾はこの外に於てもすべてえ。	

<p>【附録】 國語假名遣一覽</p> <p>をかす(犯・冒) をかば(陸稻) をかみ(傍觀) をかむ(拜) をがら(麻幹) をぎ(荻) をけ(桶) をけら(尤) をこ(愚・痴) をこがまし(痴) をこぞ(臆) をさ(長) をさ(箆) をさなし(幼) をさむ(治・修・牧・藏・納) をさをさ(大抵) をし(鴛鴦) をしどり(鴛鴦) をしね(小稻)(食稻) をし(惜・愛) をしむ(惜・愛) をしき(折敷) をしふ(教) をとこ(男)(男つ子) をどし(穢)</p>	<p>をとゞし(一昨年) をとゝひ(一日) をとめ(少女) をととり(媒鳥) をどる(踊・跳・躍) をの(斧) をのこ(男)(男の子) をのゝ(尾上) をば(伯叔母)(小母) をばな(尾花) をはる(終了) をひ(甥) をみごも(小忌衣) をみな(女) をみなへし(女郎花) をめく(叫喚) をもの(食物) をり(檻) をり(居) をり(時) をる(折) をろち(大蛇)</p>	<p>さを(竿・棹) さつを(獵夫) しをり(葉) しをる(萎) しをらし(可憐) しらを(白魚) たをやか(婢娟) たをやめ(手弱女) たけを(猛男) とを(十) とをむ(撓) まをす(申) ますらを(丈夫) みを(滯)(水脈) みをつく(滯漂) みさを(操) みやびを(風流男) ふなを(船長) むらさを(村長) やをら(徐) わざを(俳優)</p>	<p>けふ(今日) さふらふ(候) たふとし(貴) たふる(仆・倒) とほたふみ(遠江) はふる(投) ふくろふ(鼻)</p> <p>(注意) 1. 語の頭にあつて「お」と發音する時、ほ・ふを用ひることは全くない。 2. 語の間・語の末に於ては「お」を用ひることはほとんどなく、ほを用ひることが最も多い。</p>
--	---	---	--

【附録】 國語假名遣一覽

<p>は</p> <p>こわいろ(聲色) こわね(聲音) ことわざ(諺)(言葉) ことわり(理) ことわる(斷) このわた(海鼠腸) さわぐ(騒) さわやか(爽)</p>	<p>しわ(皺) しわし(吝) しわま(島曲) しわざ(業)(所爲) すわる(坐) たわし(束菓子) たわむ(撓) たわいなし</p>	<p>たわやか(婢娟) たわやめ(手弱女) のわけ(野分) はらわた(腸) ひわ(驢) みなわ(水泡) よわる(弱) よわし(弱)</p>	<p>(注意) 1. 語の頭にあつて「わ」と發音する時、はを用ひることは全くない。 2. 語の間・語の末に於ては「は」を用ひることが最も多い。</p>
<p>ふ・う</p> <p>うう(植) うう(餓) すう(据) まうく(設) まうく(儲) まうす(申) まうづ(詣) やうやく(漸)</p>	<p>にようばう(女房 によばう) ふうふ(夫婦 ふーふ) やうか(八日 やーか) 次の如く音便によりてうとなるもの うつくしう(美しく) かなしう(悲しく) たかう(高く) ひくう(低く) かうし(格子 かくし) かうぶり(冠 かかぶり)</p>	<p>はうき(帚 ははき) かうち(河内 かはち) あきうど(商人 あきひと) いもいと(妹・妹人 いもひと) なかうど(媒酌 仲人 なかひと) くろうと(玄人 黒人 くろひと) いうて(云ひて) きそうて(競ひて) なうし(直衣 なほし)</p>	<p>かうがい(筭・髮搔 かみかき) かうべ(神戸 かみべ) こうち(小路 こみち) たうがみ(疊紙 たみがみ) てうづ(手水 てみづ) たうげ(峠 たむげ) ひうが(日向 ひむか) こうや(紺屋 こんや)</p>

語の頭・語の間・語の末共、次にあげた以外の語にははを用ひる。

ちち(爺・祖父)
ちぢむ(縮)
ちぢむさし

あぢ(味)
あぢ(鱒)
あぢさゐ(紫陽花)

あぢはふ(味)
うち(氏)
おぢ(祖父・翁)

おぢる(怖)
おほぢ(祖父)
かぢ(梶・楳)

【附録】 國語假名遣一覽

(zi) ジ

ぢ・じ	ぢ・じ	ぢ・じ
かぢ(鍛冶)(金打) きぢ(生地) くぢら(鯨) こうぢ(麴) こうぢ(小路) ことぢ(琴柱) すぢ(筋)	すぢみち(筋道) とぢ(綴) とぢら(閉鎖) なんぢ(汝) なめくぢ(蛞蝓) ねぢ(鏝・旋螺) ねぢける(拗)	ねぢる(捩) はぢ(恥) ひぢ(臂) ひぢ(泥) ふぢ(藤) ふぢ(かま)(藤袴・間) もみぢ(紅葉)
		よぢる(攀) わらぢ(草鞋) をぢ(伯父・叔父・小父) みそぢ(三十) よそぢ(四十) いそぢ(五十) むそぢ(六十) 等十を数へる古語

(zu) ズ

づ・ず	づ・ず	づ・ず
ずす(誦) ずるし(狡猾) すず(鈴) すず(錫) すずき(鱧) すずし(生絹) すずし(涼し) すずしろ(蘿蔔) すずな(菘) すずむ(涼) すずめ(雀)	すずり(硯) すずる(漫) あんず(杏) いしずゑ(礎) かず(數) かならず(必) きず(傷・疵・瑕) くず(葛) こずゑ(梢) たゝすまひ(様子) たゝすむ(竹)	なずらふ(準) ねずみ(鼠) はず(筭) はずみ(機) ひずむ(歪) ます(交・雜・混) みゝず(蚯蚓) もず(鴟・百舌) やはず(矢筈) ゆず(柚子) ゆはず(弾)
		りんず(綸子) さ變の濁れるもの 感ず 任ず 重んず 疎んず 輕んず 語んず 嘆ず 損ず……等々 (注意) 1. つの下にくる時はづを用ひる。 2. すの下にくる時はずを用ひる。 (例、つづみ・つづく・つづる) (例、すまり・すずめ・すずむ)

語の頭・語の間・語の末共次にあげた以外の語にはづを用ひる。

女子 皇國新讀本

四年制用全八卷

定價各卷金六〇錢



昭和十二年六月二日印刷
昭和十二年六月五日發行
昭和十三年一月七日訂正印刷
昭和十三年一月十日訂正發行

編者 山岸 徳平
編者 岩田 九郎

東京市神田區西神田一丁目三番地
發行者 株式會社 帝國書院
代表者 守屋美智雄

東京市牛込區山吹町一九八番地
印刷者 山本 禎男

東京市神田區西神田一丁目三番地
發賣所 株式會社 帝國書院
振替口座東京六七〇一四番

大阪市東區横堀四丁目三番地
關西發賣所 三宅莊藏書店
振替口座大阪 六九番

本館新刊

中華書局

第一冊
第二冊
第三冊
第四冊
第五冊
第六冊
第七冊
第八冊
第九冊
第十冊

中華書局
發行

本館新刊
中華書局
發行

中華書局
發行

一
卷
新
月
子

